

文部省検定済教科書

教科書文庫
6
810
46-1949
0130449683

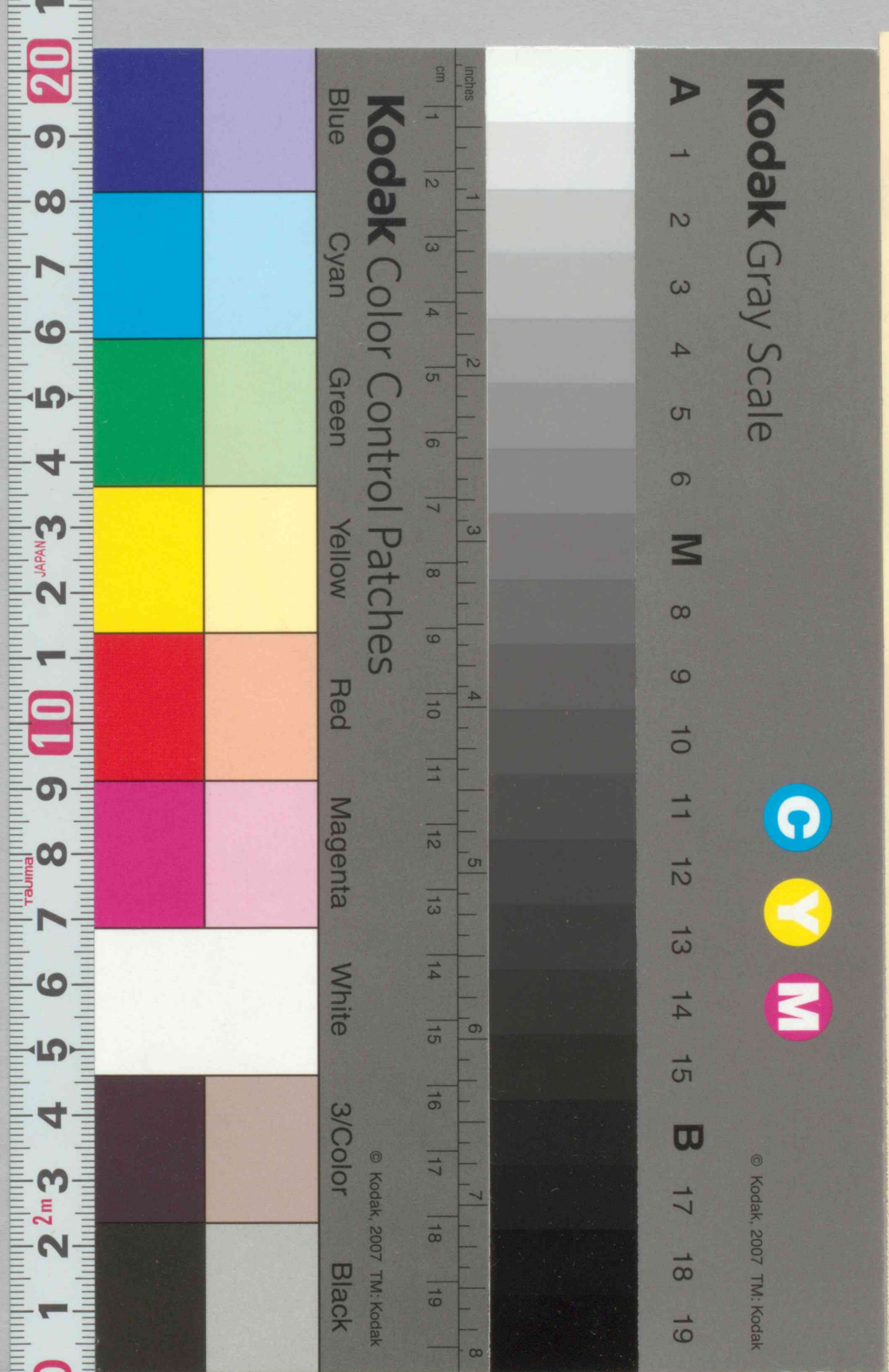
新国語

われらの読書 三

三省堂

高等学校三年用

高KC
Sa66
w



60367

教科書文庫

6
810
46-1949
01304 49683



© Kodak, 2007 TM: Kodak



昭和 24 年 10 月 10 日 文部省検定済
高等学校 国語科用

新 国 語

われらの読書 三

三省堂出版株式会社

教科書文庫
6
810
46-1949
0130449683

三省堂編修所編

広島大学図書
0130449683

高等学校三年用

広島大学
教育学部図書

中央図書館

広島大学図書
0130449683

原著作者ならびに先生がたへ

高等学校における一般国語教養のための国語教科書としては、言語生活そのものを陶冶する分科と、文学を中心とした一般文化教養を目的とする分科との、二つを確立することが必要です。その見地から、本教科書は各学年とも「ことはの生活」と「われらの読書」を編修し、この二分冊を同時に併用するがたちをもつて、それらの学年の国語教程としました。

なお、この教科書に収めた諸作品は、そのほとんどが「教科書に収めるため」に、当用漢字・現代かなづかいの適用を受けるなどして、原著の姿を少なからず変えています。編者は、そういった制約が原作の価値を著しく傷つけないように努力したつもりです。新しい次代を背負う青少年のために、まげておゆるしのほどを願います。

編修委員長

土井忠生

編修委員

藤原与一
田中浩造
森田武
末田賢
尾上充
木原茂

目次

世界への道……………一

I 生きてゆく魂

一 高翔……………ポロドレール 村上菊一郎訳……………四

二 ハムレット……………シェイクスピア 本多顕彰訳……………六

三 生きるはらから……………ロマン・ヒローラン 豊島与志雄訳……………一五

II うたう心

四 晋我追悼曲……………与謝蕪村……………三

五 万葉秀歌……………斎藤茂吉……………三

六 ほたる狩……………谷崎潤一郎……………四〇

III 世 界

- 七 ゲーテ的とシェークスピア的……………工藤好美……………兜
 八 寒山拾得……………森 鷗 外……………函
 一 覧表——「われらの読書 三」学習のために……………(1)

世界への道

われ／＼は、ことばや文字や文章によって、人間がほんとうに人間でありうるということを知り、学んできた。個人が、自己をみがく道具や自己の生活を鍛える場所も、言語・文章の中にあることを知った。自己をつくるということが、何を意味するかも知っている。この自己が、それ／＼に完全に生きてゆき、それによってまた、他をよりよく生かすことも学んだ。社会生活ということが、どんな意味を持っているかも知得たはずである。

多くの個人、多くの地方、多くの国、多くの人種によって、^よ叡知と感情と意力に満ちた言語・文章が、文化の粹として、われ／＼に与えられている。しかし、それを、単に文化遺産としてながめるだけでは、それらは死物にとゞまるであろう。創造、拡充することによって、永遠の生命が保たれるのである。そういう創造や拡充がどのように言語生活の上で果されているかを、われ／＼は見てきた。すなわち、与えられたものをさらに深めることがつくることであり、また拡げることであると知らなくてはならない。

同じく人間のものでありながら、地球上の国々には、これほどにも違うものかと驚くような言語や、したがってまた、文字や文章が行われている。それだけ、特殊な文化の伝統や感覚が生きているのである。個人が自己を見つめ、他人をながめて、その生活を鍛えてゆくように、文化感覚も次第に洗練され、深められて、独特の輝きを持つてくる。風土による物の考え方の違いは、文化を規制して、政治や道徳や芸術や科学に、如実に現われる。貫くものは、どこまでも貫かないではおかない。文学における古典の意義も、

その古典を共有する人々の文化を、深めることに関係している。深めれば深めるほど、輝きはいよ／＼増してくる。輝きは四方に発する。他の輝きにおのれを照らしてみても、おのれの輝きもまた増すものである。貫き通すものは、やがて、通し合うものである。ちょうど、個人がそれ／＼に独立した一個であつて、はじめて、社会ができたように。

古今にわたり、東西を通じて、すぐれたものには心から敬意を表して学ばなくてはならない。山のような宝庫がこゝにある。言語の障害を除こうとする試みも、こういう態度から生まれてきたのである。それどころか、ことばを一つにしようとする運動さえ見られる。貫くものが、通ずるものへと展開してゆくのは必然の勢いである。

個人は、個人を貫くことによって、その窓を内外に開く。開かれた窓は人々をつなぐ。社会を通じて、個人は世界に参与する。

世界。なんという壮大な美しいことばであろう。人類の努力の結晶として積みあげられた文化の輝きは、すべてわれらのものである。

個人個人が中心となつて、生きた球体ができあがる。近くから遠くへ、遠くから近くへ、地域の社会が、職業の社会が、文化感覚の社会が、国家という社会が、それ／＼の生きた球体をつくる。個人は社会を通じて、さらに大きな、生きた球体をつくる。無数の中心があり、無数の辺際がある。

ことばは、われ／＼の言語生活は、世界を一つにし、人類を一つにするところまできて、はじめて、その意義を全うする。

「世界人権憲章」の第一条に言っている。

「あらゆる人間は生まれながらにして自由であり、平等の威厳と権利を有する。人は本来、理性と良心を賦与されており、したがつて、同胞の精神をもつて、相互に対し行動すべきである。」

世界に通ずる理性と良心の声こそ、世界のことばであり、同胞の精神こそ、人間の物言う心である。

I 生きてゆく魂

一 高 翔

ボードレール

池を越え、谷を越え、
山や森を越え、雲や海を越え、
太陽のかなた、エーテルのかなた、
星くづのきらめく天球のはても過ぎ、

わが精神よ、なんぢはすばやくかけめぐる。
陶然と波間に浮かぶ泳ぎの名手さながらに、
えもいへぬ雄々しき愉悦を感じつゝ、
広漠たる無限の中をなんぢは喜々と進みゆく。

飛べ、この病的なる瘴氣遠く離れて、
行け、上層の風に身をきよめに。

しかして飲め、醇乎たる神酒のごとく
澄みわたる虚空にみなぎる明かるき火を。

もや深き生活の上へのしかゝる
かの倦怠と大いなる悲哀をしりめに、
光り輝く清朗の境の方へとあまがける、
たくましき翼もつ身は幸ひなるかな。

そのおもひ、ひばりのごとく、あかつきに、
心のまゝに大空へ舞ひ上がり、
― 人生の上を飛びめぐり、花や声なき万象の
ことばをいともやすくと解しうる身は幸ひなるかな。

(村上菊一郎訳「悪の華」による)

○ボードレール Charles Baudelaire (1821—67) 近代フランスの最も傑出した詩人。深刻な想像力と、俊鋭な感
覚と、人間的な感情とを發揮して、近代詩の世界に開闢の偉功を立てたと称せられる。著作には、詩集「悪の
華」、論説「浪漫的芸術論集」「審美猟奇」、散文詩「巴里の憂鬱」の外、小説・翻訳がある。

○村上菊一郎 (1910—) 詩人、翻訳家。広島県出身。早大仏文科卒業。山内義雄に師事した。「悪の華」「仏蘭西詩
集」などの翻訳がある。

○悪の華 Les Fleurs du Mal (1857 初版) ボードレールをしてボードレールたらしめた詩集で、この一巻にあら
ゆる近代詩の叙知と感覚が凝集しており、世界の近代詩壇に多くの影響を与えている。

【研究】

- 1 この詩の精神は何か。
- 2 ボードレールの作品をできるだけ読んで、その感想を述べよ。
- 3 日本近代詩との関係を調べてみよう。

二 ハムレット

シェイクスピア



デンマーク先王の亡霊の告げによって、王子ハムレットは、父先王の死が、おじである新王クロードディアスの陰謀——王位と王妃とを得ようとする——による毒殺であることを知った。ハムレットは、新王および今はその妃となっている母ガートルードに対する復讐を堅く誓う。

かれは多感で聰明な精神と、冥想的な、そして懐疑的な精神との複雑な性格の持ち主であるが、このような事情に身をおいて、情熱と理智との矛盾に悩み、深いゆううつに沈んで、復讐の実行をちゅうちよする。しかし次々と起る外界の事情に、ついにかれの憂悶は払い去られ、その勇気と決断とを情熱的に表わして行く。

王と誤って恋人オフィリアの父ポロニアスを刺したハムレットは、王によって国外に追放され、そこで謀殺されようとするが、よく

まぬかれて再び帰国する。しかし、こゝには発狂したオフィリアの水死がかれを待っている。自分も、父のあだを求めるオフィリアの兄レアテーズとの決闘を迫られ、王および王妃の面前で仕合いが行われるが、かれらはともに倒れ、王、王妃もまたその罪の報いをうける。

こゝに引いたのは第三幕第一場。ハムレットは父王の亡霊の告げによって、毒殺の事実を確かめようと狂人を装っているが、王および王妃は、ハムレットの旧友ローゼンクラッツ、ギルデンスターン、さらにオフィリアを使って、王子の真意を探らせようとする有名な場面である。

登場人物	デンマーク王	クロードディアス。
	王妃	ガートルード。ハムレットの母。
	ハムレット	先王の子で現王のおい。
	ポロニアス	内大臣。
	オフィリア	ポロニアスの娘でハムレットの恋人。
	ローゼンクラッツ	
	ギルデンスターン	宮臣。ハムレットの旧友。
場 所	デンマーク王宮廷。	

王、王妃、ポロニアス、オフィリア、ローゼンクラッツ、ギルデンスターン登場。

王 それでは、なぜかれがあのように乱心を装い、その騒がしい危険な狂気で、せっかくの静かな生活をもどくいらだたせているか、えんきよくに尋ねてみたのでは、知ることができないと言うのかね。
 ローゼ 御自身気がへんになったように思うとおっしゃっていますが、どんな原因からお話しなさいません。

ギルデ それを探られるのを、お喜びではないようにお見うけいたしました。そして御本心をお打ち明けなさいますようにしむけますと、狂気を装って、避けておしまになります。

王妃 あなたがたを喜んでお迎えしたの。

ローゼ たいそう御丁重に。

ギルデ しかし、すまぬお心を押して。

ローゼ おことばを惜しみ遊ばして、しかし、お尋ねすることに対しては、ことは数多くお答えになりました。

王 なにか遊びに誘ってみてくれたの。

ローゼ 陛下、ちょうど私どもは、途中、ある役者どもを追いついて来ましたものでございますから、そのことを殿下に申しあげますと、それをお聞きになって、殿下はお顔にお喜びの色をお浮かべなさいました。役者どもは宮中に来ておりました、今夜は殿下の御前で芝居をする御命令を受けております。

ポロー そのとおりでございまして、両陛下がそれを御覧においでくださいますよう、私からお願ひせよとの殿下の仰せでございました。

王 喜んで行こう。かれがそういう気になったと聞いて、たいへん満足だ。みんなのもの、かれをもつと励まし、そういう娯楽にかれの心を向けるようにしてもらいたい。

ローゼ かしこまりました。ございます。

(ローゼンクランツとギルデンスターン退場)

王 ガートルード。あなたも席をはずしてください。ここで、偶然のようにオフィリアに会うよう、

かれをひそかに呼びにやっておいたから。彼女の父と余とが、法の許した間諜として、こゝに隠れ、向こうからは見られないで、こちらからは見ていて、かれらの会見を腹藏なく判断し、はたしてかれの悩みの種が恋の苦しみかどうか、かれの振舞いから推測することになっているのだから。

王妃 御命令に従います。ねえ、オフィリア、どうかして、あなたの美しさがハムレットの狂気のためた原因だといいわね。それだと、あなたの美点がハムレットを正気に返すことになって、あなたがたふたりの名誉にもなりますもの。

オフィ 陛下、私もそうなればいいと思えますの。(王妃退場)

ポロー オフィリア、こゝを歩いておいで。陛下、隠れておきましょう。(オフィリアに) これを読んでおいで。(聖書を渡す) 行を^{まよ}しているふうをしていけば、ひとりいてもへんではないからな。信心深い顔と、敬虔な振舞いで、悪魔の心を体裁よくかくすことは——よくわれ／＼も経験することだけれど——けしからんことではあるがね。

王 (傍白) おゝ、それはあまりにも真実だ。そのことばがおれの良心にあてるむちの痛さはどうだ。塗りたてた化粧で美しくなった女の顔が、塗った紅おしろいに比べて醜いよりも、美しく飾りたてたおれのことばに比べて、おれの行為は、もっと醜いのだ。あゝ、重い重荷。

ポロー おいでになるけわいでございます。かくれましょう、陛下。(王とポローニアス退場)

(ハムレット登場)

ハムレ あるべきか、あるべきでないか、それは疑問だ。無法な運命の石投げ器と矢とを忍ぶのと、海なす苦惱に武器を執り、それと戦って亡ぼすのと、いずれがけだかい心であろうか。死ぬことは、眠ること

と。それっきりだ。眠ることによって、心の痛みと、肉が受けねばならぬ幾千の自然の苦しみとを終らせうものならば、それはだれしも熱望する終局だ。死ぬことは、眠ること。眠ってたぶん夢を見る。そうだ、そこにさわりがあるのだ。われ／＼がこの人間生活の騒ぎをのがれた時に、その死の眠りの中で、どんな夢が現われるかもしれないということが、われ／＼を立ち止まらせる。そこが、不幸な生活を心ならずも長引かせるところだ。なぜなら、さやを払った短剣で、われとわが命を終らせることができるものならば、だれがこの世のむちと嘲笑を忍ぼうか。だれが、迫害者の虐待を、傲慢な男の無礼を、捨てられた恋の苦痛を、判決の遅延を、役人どもの無礼を、忍耐強いりっぱな人がけちなやつから受ける侮辱を、だれが忍ぼうか。死後のある恐怖が、いや、その国境からはひとりも旅人のもどったためしのない未知の世界が、決心をゆるがせ、知らない不幸へ飛んでゆくよりは、まだ現在の不幸を忍ぶ気にならせるのでなければ、だれが、この重荷を背負って、苦しい人生のもとにうめき、汗しようか。このように、良心がわれ／＼すべてを臆病ものにする。かくして、決断の自然の色が、心配のおお白い病的の色におゝわれ、最高最大の企ても、この考慮のためにその針路をそらして、行為の性質を失うに至る。だが、さて、静かに。おゝ、美しいオフィリア。あなたの祈りの中に、ぼくの罪のことも忘れないようにね。

オフィ 殿下、近ごろ、ごきげんはいかがでいらっしゃいますの。

ハムレ ありがとうございます。達者だよ。達者だよ。

オフィ 殿下、あたし、いたゞいたおしるしをこゝに持ってまいりましたのよ。ずっと前から、お返ししようと思っていましたの。今お受けとりくださいませんか。

ハムレ いや、ぼくはあなたに何もあげた覚えはない。

オフィ 殿下、そのことはよく覚えていらっしゃるくせに。これに添えて、これをいっそううれしいものにするような甘いおこぼれをくださったじゃありませんか。けれど、そのかおりがうせてしまったのですもの、あたし、これは、お返しいたしますわ。与えた人の心が不親切になった時には、りっぱな贈り物も、けだかい心には、貧しいものになってしまいますもの。

さあ、これ、殿下。

ハムレ は、は、あなたは貞節なの。

オフィ え。

ハムレ あなたは美しいの。

オフィ それはどういう意味ですの。

ハムレ あなたが貞節で美しいなら、あなたの貞節をあなたの美しさになれ／＼しくさせちゃいけないって意味さ。

オフィ 美しさが親しくする相手に、貞節よりもよいものがあるとでもおっしゃいますの。

ハムレ そうだよ。美の力が貞節をけがしてしまうほうが、貞節の力が美を自分と同じものにするよりももっと早いからね。これは昔は逆説だったけれど、今は世間がそれを証明している。ぼくは以前にはあなたを愛したよ。

オフィ ほんとに、そうですわ。あなたは、そうあたしに信じさせなすったわ。

ハムレ あなたはぼくを信じてはいけなかったんだね。美德は、その味わいのない台木につき木すること

はできないからね。ぼくはあなたを愛してはいなかったんだよ。

オフイ じゃ、なおさら、あたしの思い違いがひどかったわけね。

ハムレ 尼僧院へいらっしやい。罪人を生んだりすると困るから。ぼく自身はかなり正直だが、それでも、いろ／＼のことで、自分を責め、母が生んでくれなかったらよかったと思うほどだからね。全く、ぼくはたいそう高慢で、復讐心が強く、野心家で、ぼくにはそれを言い表わす頭も、それに形を与える想像力もなく、また、それを実行する余裕もないほどたくさんの罪を、いつなん時でも犯しそうなんだ。ぼくのようなやつが、天と地との間をはいまわって、何をしようというのだろう。われ／＼は、みんな極悪人だ。われ／＼の言うことなんか信じちゃいけない。尼僧院へいらっしやい。あなたのおとうさんはどこにいるの。

オフイ うちにいますわ。

ハムレ 自分のうち以外でばかなまねをしないように、閉じこめておきなさい。さよなら。

オフイ どうか、あのかたをお守りくださいますように、あなたがた、美しい神々さま。

ハムレ もし結婚するなら、こんなろいを持参金としてあげよう。——あなたが氷のように清浄で、雪のように純潔でも、中傷はまぬかれないうら。尼僧院へいらっしやい。さようなら。それとも、もしぜひ結婚したいなら、ばかと結婚なさい。賢い夫は、あなたのために、角の生えた怪物にされるだらうってことをよく知っているからね。尼僧院へいらっしやい、早く／＼。さようなら。

オフイ 天の神々さま、どうか、あのおかたの正気をお取りもどしてくださいますように。

ハムレ ぼくは、あなたがぬりたてるということを、何度も聞いたけれど、それは、神々があなたに一つの顔をお与えになったのに、あなたが、もう一つの顔をこしらえあげることになる。あなたは踊ったり、気取って歩いたり、小声で話したり、神の造化にあだ名をつけたり、けがれも無知ゆえだと言ったりしている。いやだ、いやだ、もう言うまい。気が狂いそうだから。ねえ、ぼくたちの結婚はもうよそうね。結婚したやつらは、たゞひとりのほかは、生き長らえさせておいてやるう。ほかのものは今のまゝにしておいてやるう。尼僧院へいらっしやい。(退場)

オフイ おゝ、けだかいお心が、なんとというひどいお変わり方でしょう。殿上人の目、学者の舌、武人の剣、御国の希望と花、作法のかゞみ、行儀の手法、すべての人の尊敬の的、それが、みんな、みんな、地におちてしまった。すべての婦人のうちでいちばん悲しい哀れなあたし、あのおかたのうれしい誓いの蜜を吸ったあたし、そのあたしは、今けだかい、この上ない理性が、調子はずれにがら／＼鳴る美しい鐘のようになったのを見、花の開いた青春の比類のない姿かたちが、狂気でそこなわれてしまったのを見た。あゝ、悲しい。昔を見たその同じ目で、今のさまを見ようとは。

(王とポーニアス登場)

王 恋だつて。かれの感情はそちらへは傾いてはいないじゃないか。かれの言ったことは、少しは秩序を欠いてはいたけれど、狂気のようにではなかった。何かがかれの胸のうちにあって、それをくよくよ思つてゆううつになっているのだ。それが瞬つたら、危険なことになるんじゃないかと気づかわれる。それを予防するために、余は急に決心して、こういうことにした——かれを急いで英国へ送り、息納しているみつぎ物を請求させよう。たぶん、さま／＼の海や、さま／＼の国のいろ／＼の風物が、かれの胸のうちにいくぶん固着して、かれをくよくよ思わせて狂気にしているものを散らすであらうから。そ

れについておまえはどう思うか。

ポロー 結構に存じます。けれども、私は、あのかたの御悲嘆の源と始まりは、かなわぬ恋から起ったと信じます。どうした、オフィリア。おまえはハムレット様のおっしゃったことを、わしたちに話すに及ばぬ。わしたちはすっかり聞いていたからな。陛下、御意のまゝになさいます。しかし、適当だとおぼしめすなら、芝居のあとで、母后様おひとりで、あのかたと差し向かいで、お嘆きの原因をお尋ねになつて、卒直にお話しあいなさるようにはいかゞでございましょうか、そして、私は、御許可くださいますれば、おふたりがたの、御会談の聞えるところにいるようにいたします。もし御母后様にもあのかたの御本心がおわかりになりませんでしたら、英国へお送り遊ばすなり、こゝとおぼしめすところへ御監禁遊ばすなりなさいませ。

王

そうしよう。身分の高い者の狂気は、監視なしではおけないからな。(ふたり退場)

(本多顕彰訳による)

William Shakespeare (1564—1616)

しばく大自然にもたとえられる世界最大の劇作家として有名である。かれの人と作品についての研究自体が、すでに世界の題目となつて久しい。日本においても明治以来その作品の翻訳や研究が数多く公にされている。

かれは二十二歳の時、ロンドンに出はじめ俳優として舞台にも立つたが、後劇場付作者として戯曲三十六編を作つた。悲劇、史劇、伝奇劇などあらゆる部門にわたる作品によつて、多種多様な人間の性格を描き出している。

おもな作品に、「ロミオとジュリエット」「ベニスの商人」「ジュリアスシーザー」「リヤ王」「ハムレット」などがある。

坪内逍遙「シェークスピア研究集」・ラム「シェークスピア物語」は定評ある手引書である。

○本多顕彰(1898—) 評論家、英文学者。愛知県出身。東大英文科卒業。法政大学教授。翻訳にモールトン「文学の近代的研究」、「ロミオとジュリエット」、著述に「批評家の覚え書」、「文学論」などがある。

【研究】

- 1 世にハムレット型ということが言われている。どういう性格であろうか。
- 2 シェークスピアについて調べよ。
- 3 演出してみよ。

三 生きるはらから

ロマン・ローラン

フランス中部のある土地に、ジャンナンという名望家があった。そこには、姉のアントアネットと、それより五つ年下の弟オリヴィエとが、温室の花のように育てられていた。姉は快活でむとんじやくであり、弟は病身で、生活力の弱い、夢想的な少年であった。ふたりの性格は相反していたが、ともに音楽を楽しみ、心から愛し合っていた。

銀行家であったかれらの父が事業に失敗して自殺したのちの一家は、没落の一路をたどるほかなかつた。

母は職を求めするために、ふたりの遺児を連れてパリに出た。姉のついでにオリヴィエ家をたよって行ったところ、少しもめんどうを見てくれず、主人の生前に交際していた人々も、全く今は離れてしまった。ようやく司法官ポアイエの同情によつて借りた金も、一時をしのぐだけのものではなかつた。いろ／＼努力したのち見つけた職は、修道院のピアノ教師の地位であつた。しかも、それだけでは生活苦をきりぬけることができなくて、無理に

筆耕の仕事をした過勞から、ついに母は、悲嘆の涙にくれるふたりの子に見守られながらこの世を去ったのであった。

はじめのうちは、名状しがたい絶望のみだった。ふたりを救ってくれた唯一のものは、過度の絶望そのものだった。オリヴィエはほんとうの癡癡状態に陥った。そのためアントアネットは自分の苦しみから気がそらされた。彼女はもう、弟のことしか考えなかった。その深い愛情はオリヴィエの心にしみ通り、かれが苦悶のあまり危険な逆上に陥ることを防いだ。母親の遺骸が休らっている寝台のそばで、小さなランブの光の下で、ふたりは互に抱き合っていた。死ぬよりほかはない、ふたりとも、すぐに死ぬよりほかはない、とオリヴィエはくり返した。そして窓をさし示した。アントアネットもまた、その痛ましい願望を感じていた。しかし彼女はそれとたゞかった。彼女は生きたかった……。

「生きて何になるんだ。」

「このかたのためによ。」と、アントアネットは言った。(彼女は母をさし示していた。——)「このかたは、やはり私たちといっしょにいらっしゃるわ。考えてごらんなさい……私たちのためにさんぐお苦しみなすったのだから、いちばんひどい苦しみ、私たちがふしあわせて死ぬのを御覧なさるといふ苦しみは、ああ、おかけしないようにしなければいけません……。」と、彼女は感情に激して言った。「……それに、そんなあきらめ方をしてはいけません。私はいやよ。私はどうあっても逆らうわ。あなたがいつかは幸福になることを、私望んでるのよ。」

「幸福になるものか。」

「さうさ、きつとなつてよ。私たちは、あんまり不幸だったわ。いまに変わってくるわ。変わるに違いな

いわ。あなたは生活をたててゆき、家庭を持ち、幸福になるでしょう。それが、それが私の望みよ。」

「どうして生きてゆけるの。私たちにはとてもできな……。」

「できますとも。なんだと思ってるの。あなたが自活できるようになるまでの間のことよ。私が引き受けるわ。見てごらんなさい、私をやってみせるから。あゝ、おかあさんが私のするとおりに任してくだすったら、もうちゃんとできてたのに……。」

「何をするつもりなの。わたしはねえさんに恥ずかしいことをさせたくない。それに、ねえさんにはできやしない……。」

「できますよ……。働いて生活するのは——正直でさえあれば——少しも恥じることはありません。心配しないでちょうだい、お願いだから。見てごらんなさい。万事うまくいきます。あなたは幸福になります。私たちは幸福になります。ねえオリヴィエ、このかたも私たちによって幸福になります。」

ふたりの子供だけが、母のひつぎの供をした。

かれらはその建物の最上階に、ごく小さなへやを借りた。——屋根裏の二室、食堂となる小さな控え室、押し入れくらいな大きさの台所。他の町へ行けば、もっといいすまいが見つかるかもしれない。しかしこゝに住んでいると、かれらはなお母親といっしょにいるこゝちがするのだった。門番の女はかれらに多少の同情を示してくれた。けれど、やがて彼女は自分の仕事に気を取られてしまった。そしてもう、だれもかれらにかまってくれなかった。同じ建物に借家している人たちで、かれらを知っている者はひとりもなかった。そしてかれらの方でも、隣にだれが住んでいるかさえ知らなかった。

アントアネットは母のあとを継いで、修道院の音楽教師となることができた。そしてなお、ほかにもけいこの口を捜した。彼女はたゞ一つのことしか考えていなかった。弟を育てて師範学校に入れること。彼女はひとりですう決めていた。要項を調べ、種々聞きあわせ、オリヴィエの意見をも尋ねてみた——が、かれはなんの意見も持たなかったのだ。彼女がかわって決定してやったのだった。一度師範学校にはいれば、生涯バンの心配はいらないし、未来は意のままになるはずだった。そこまでかれが到達することが必要だった。それまではどうしても生活してゆくことが必要だった。五、六年の恐ろしい間だった。が、どうにかやり遂げられるはずだった。そういう考えがアントアネットのうちで異常な力となって、ついに彼女の心をすっかり満たしてしまつた。今後の孤独なみじめな生活は、彼女の目にもはつきり前方に広がって見えていたが、その生活をあえてなしうるのも、彼女の心を占めている熱烈な感激のゆえであった。弟を救ってやり、もはや自分は幸福になれなくとも、弟を幸福にしてやるといふ、その感激のゆえであった……。この十七、八歳の浮きくしたやさしい小娘は、勇ましい決心のために一変してしまつた。だれにも気づかれなかつたし、彼女自身もさらに気づかなかつたが、献身の情熱と奮闘の誇りとが彼女のうちにあった。女の危険な年ごろには、かの熱っぽい春のはじめのころには、多くの愛情の力が、あたかも地下に音をたてている隠れた泉のように、一身を満たし、ひたし、包み、おぼれさせて、絶えざる迷執の状態におとし入れるものであるが、その時愛情はあらゆる形で現われる。そしてたゞ、自己を与え自己を他人のかてに供することしか求めない。何かの口実がありさえすれば、その清浄な深い欲情はたゞちにあらゆる犠牲心へ変化しようとしている。愛情は、アントアネットをして友愛のえじきたらしめた。

弟は彼女ほど情熱的ではなかつたから、そういう動力を持たなかつた。その上、かれのために向こうから身をさへげてくれるのであつて、かれの方から身をさへげていゝるのではなかつた——愛する時には、この方がずつと気楽であり楽しいものである。けれどかれは、自分のために姉が刻苦しているのを見ると、重苦しい呵責の念を感じるのだった。かれはそのことを姉に言つた。姉は答へた。

「まあ、お気の毒ね。私が生きがいを感じてゐるのはそのためだといふことが、あなたにはわからないの。あなたのために苦労してゐるといふことがなかつたら、私になんで生きてゐる理由がほかにありませんか。」

かれにはそのことがよくわかつてゐた。かれがもしアントアネットの地位にあつたら、かれもやはりその尊い辛苦をほしがつたであらう。しかし、自分が彼女の辛苦の原因であるとは……かれの自尊心と愛情とはそれを苦しめた。そして、一身に負わされた責任は、成功の義務は、かれのような弱いものにとつてはたまらない重荷であつた。姉はかれの学業の成否に自分の生涯を賭けてゐるのだった。そういうことを考へるのは、かれには堪えがたかつた。そしてかれの力を増大させるどころか、時とするとかれを圧倒することもあつた。けれどもとにかくそれは、反抗し、勉強し、生きることをかれにしいた。そういう強制がなかつたら、かれはおそらく生きることができなかつたかもしれない。敗北——おそらくは自殺——への先天的傾向がかれのうちにはあつた。覇氣をいだし幸福であるようにと、姉がかれに望まなかつたら、かれはその傾向に引きずりこまれたかもしれない。かれは自分の天性がほかから逆らわれることを苦しめた。けれども、それが結局しあわせだつた。幾多の青年が、官能の錯誤にかられて、二、三年間の狂愚な行いのために、全生涯を再び回復しえないほど害して、全くだめになつてしまふあの恐るべき年ごろを、危機の年齢を、かれもまた通つてゐた。かれは自分のうちを内省するたびに、病的な夢想に、人生に対する嫌悪、バリに対する嫌悪、いっしょに入り交じつて腐つてゆく無数の人間の、きたない発酵に対す

る嫌悪の情に、いつもとらわれるのであった。しかし姉を見ると、その悪夢は消えうせてしまった。そして、彼女は、かれを生かさんがためにのみ生きていたから、かれも生きる気になった、心ならずも幸福になりたいた気になった……。

かくて、堅忍と宗教と高尚な願望とでできている熱い信念の上に、かれらの生活は打ち立てられた。ふたりの子供の全存在は、オリヴィエの成功というたゞ一つの目的へ向けられた。アントアネットは、いかなる仕事をもいかなる屈辱をも甘受した。彼女は方々の家庭教師をした。ほとんど召使同様に取扱われた。女中みたいに教え子の散歩の供をし、ドイツ語を教えるという名目で、幾時間もいっしょに往来を歩かねばならなかった。そういう精神上の苦痛や肉体上の疲労にも、彼女は弟に対する愛情によって、また時には自負心によって、一種の享樂を見いだすのであった。

彼女は疲れきつてもどって来ながら、オリヴィエの世話をしやうとした。オリヴィエは半寄宿生として中学で一日を過ごし、夕方にしか帰って来なかった。彼女は夕食のしたくをした。ガスこんろかアルコールランプかで。オリヴィエはいつも食べたがらなかった。どんな物にもいやきを起し、肉をさえきらった。無理に食べさせるか、あるいは気に入るちよつとした料理をくふうしなければならなかった。そしてかわいそうにアントアネットは、料理がじょうずではなかった。非常にほねおったあとでも、彼女の料理は食べないとかれから言われるような、悲しいめに出会った。台所のかまどの前の絶望——不器用な若い世帯婦のみが経験する、だれにも知られないところの、生命を毒し、時には睡眠をも毒する無言の絶望——それを幾たびもくり返したのちに、ようやく彼女は少し覚え知ったのだった。

食事のあとで彼女は、使った少しのさらを洗ってから——かれはその仕事を手伝おうとしたが、彼女は承知しなかった。——弟の勉強を母親みたいに監督した。その感じやすい少年の気持を害さないようにいつも注意しながら、学科を暗誦させ、宿題を読んでやり、調べてやることさえあった。食卓と勉強机とに兼用しているたゞ一つのテーブルで、ふたりは晩を過ごした。かれは宿題をし、彼女は縫い物か写し物かをした。かれが寝てしまうと、彼女はかれの服の手入れをしたり、または自分の勉強をしたりした。

どうにか暮らしてゆくのでさえ非常に困難ではあったが、ふたりは互に心を合わせて、たくわえることのできる金はまず何よりも、母がポアイエ家から借りている負債を返すのに当てることとした。それは、ポアイエ家の人たちが、うるさい債権者だからというのではなかった。かれらからは、風のたよりもなかった。かれらはその貸し金を全く失ったものだと思つて、もう念頭に置いてはいなかった。それだけの金で不名誉な親類をやっかい払いしたことを、心では喜んでいた。しかしふたりの子供の方からいえば、軽蔑すべきその連中に母親が何かの借りがあつたことは、自尊心と孝行心との上から苦しかった。ふたりは不自由を忍び、少しの慰みや服装や食物などからわずかなものを節約して、借金の二百フランまでにこぎつけようとした。——それもかれらにとつては大金だった。アントアネットは自分ひとりだけ不自由を忍ぼうとした。しかし弟は彼女の考えを知ると、ぜひとも同様にせずにはいられなかった。かれらはふたりともその仕事に心を尽くして、日に幾スーカを余しうる時はうれしかった。

儉約を旨としてわずかずたくわえながら、かれらは三年間に所要の金額に達することができた。非常な喜びだった……。アントアネットはある晩ポアイエ家へ行った。彼女は不愛想に迎えられた。援助を求めに来たと思われたのだった。彼女は迷惑をかけるつもりで来たのではないと言つた。借りた金を持って

来たまでのことだと云った。そしてテーブルの上に二枚の紙幣を置きながら、返済証を求めた。かれらはすぐに態度を変え、そして受け取りたくないふうを装った。

弟といっしょにどこに住んでいるか、どういうふうに暮らしているか、などとかれらは尋ねかけて来た。彼女は答を避け、再び返済証を求め、急いでいると言ひ、ひやくかにあいさつをし、そして立ち去った。かくてアントアネットは心にかゝっていた思いを晴らしたが、やはり同じ節約の生活を続けた。それも今では弟のためだった。たゞ彼女は、弟に知られまいといっそう心をくばった。自分の身のまわりを節約し、時には食物を節してまで、弟のみなりや娯楽のためをはかり、その生活を多少なりと楽しくはでやかにしてやり、時には音楽会や音楽劇に行くこと——それがオリヴィエの最大の喜びだった——を得させようとした。かれは姉を連れずにひとりで行くことを好まなかった。しかし彼女は種々な口実を設けて、いっしょに行かないようにし、またかれに心苦しい思いをさせないようにした。たいへん疲れていると言ったり、外に出かけたくないと言った。音楽は退屈だとまで言った。かれは、そういう愛情のこもったうそにだまされはしなかった。しかし年少の利己心に打ち負かされた。かれは劇場へ行った。が、ひとたびそこへはいると自責の念にとらえられた。見物している間、そのことはばかり考えていた。かれの喜びは害されるのだった。ある日曜日に、かれは姉に勧められてシャートルレー座の音楽会へ出かけたが、三十分ばかりするともどつて来た。サンミシエル橋まで行くと、もうそれより先へ行く勇氣がなくなると、かれはアントアネットに言った。アントアネットにとつては、弟が自分のために日曜の娯楽を廃してしまつたことは、悲しくもあつたがまた非常に心うれしかった。オリヴィエは、べつに遺憾とはしなかった。家にもどつて来て、姉の顔が包みきれぬ喜びに輝くのを見ると、いかにりっぱな音楽を聞くよりもいっそう

幸福な気がした。ふたりはその日曜の午後を、窓のそばに向き合つてすわりながら過ごした。かれは書物を手にし、彼女は仕事を手にしていたが、どちらもほとんど縫いも読みもせず、互の身に関係のないなんでもないことを話しあつた。かつて日曜がこんなに楽しく思われたことはなかった。これからはふたりいっしょでなければ、音楽会へも行かないという氣になった。もはやふたりは、ひとりひとりで幸福を味わうことができなくなった。

彼女はひそかに節約しながら、ピアノを一つ借りるだけの金をためて、オリヴィエをびつくりさせた。そのピアノは、一定の賃貸借の方法で、幾か月かたつと全くかれらの所有になるはずだった。負担の上に、さらにその重い負担を、彼女はあえてになつたのだった。期限ごとの支払いが夢の中まで氣にかゝつた。必要な金を得るのに彼女は健康をそこなつた。しかしそういう熱中は、かれらふたりに非常な幸福をもたらしてくれた。音楽はつらい生活の中における樂園だった。音楽は広大な場所を占めた。かれらは音楽に包まれて、その他の世界を忘れた。それには危険が伴なわななくてもなかつた。暖房のような、またはたよらない秋のようなその暖かい倦怠は、人の官能をいらだたせ意志を死滅させる。しかしそれは、アントアネットのように喜びのない過度の働きをしいられている魂にとつては、一つの休息となるのであつた。日曜日の音楽会は、絶えざる労働の一週間に輝く唯一の光明だった。この前の音楽会の思い出や次の音楽会に行く希望、パリを忘れ時を忘れて過ごすその二、三時間、それだけでかれらは生きていた。雨の中や雪の中に、あるいは風と寒さとの中に、互に身を寄せ合つて、もう座席がなくなりはしまいかと恐れながら、外で長く待ったのち、劇場にはいりこんで狭い薄暗い席につき、群集の中に没してしまつた。息をさえぎられ、四方から押しつけられて、時とすると暑さと窮屈さとに氣分が悪くなりかゝることもあつた。

——が、ふたりは楽しかった。自分の幸福と相手の幸福とで楽しかった。ベートーヴェンやワグナー¹などの偉大な魂から流れ出る、善良と光明と力との波が心の中に注ぎこむのを感じて楽しかった。愛するはらからの顔——あまりに年若くてなめた労苦や心労のために、あおざめているその顔——が輝き出すのを見て楽しかった。アントアネットはぐったりしていて、母親から両腕で胸に抱きしめられているような感じがしていた。そのやさしいあたゝかい巢の中にうずくまっていた。そしてひそかに泣いていた。オリヴィエは彼女の手を握りしめていた。その恐ろしい広間のくらがりの中で、かれらに注意を向けている者はひとりもなかった。が、そのくらがりの中で、音楽の母性的な翼の下に逃げこんでいる傷ついた魂は、かれらふたりきりではなかった。

アントアネットは信仰を持っていて、いつもそれから支持されていた。彼女は卑しい家畜みたいに服従心によってではなく、愛によって信仰していたのである。

オリヴィエはもう信仰を持つてはいなかった。しかし、かれはなお神秘的な心を失わなかった。そして、いかに無信仰になったとはいえ、かれの思想は姉の思想に最も近いものだった。かれらはどちらも宗教的霧²囲気のうちに生きていた。一日離れていたあとで各自に夕方帰ってくると、かれらの小さなへやはかれらにとつて、一つの港であった。貧しくはあるが、清浄な犯しがたい避難所であった。かれらはその中であつて、バリの腐敗した思想から、いかに遠く離れているこゝちがしたことだろ……。

かれらは自分がしたことがらについては多く話さなかった。疲れて家に帰ってくる時には、苦しかった一日のことを話してそれをまた思い起すことは、好ましくないものである。かれらは知らず知らずに、その日のことをいっしょに忘れようとしていた。ことに夕食のときに顔を合わせてしばらくの間は、互

に尋ねあうことをさし控えた。たゞ目つきであいさつをかわした。時とすると、食事中一言も言わないことさえあつた。アントアネットは弟をながめた。弟は昔小さかった時のように、さらを前にしてぼんやり考えていた。彼女はその手をやさしくなでてやった。

「さあ、」と、彼女はほおえみながら言った。「しっかりなさいよ。」

かれもほおえみを浮かべて、また食べ始めた。食事はそういうふうにして終つてゆき、かれらは口をきこうとつとめなかった。かれらは沈黙に飢えていた。……しまいに、ようやく休らったこゝちがし、おのおの相手のつゞましい愛情に包まれて、その日の汚れた印象が一身から消え去ったこゝちがする時、はじめてかれらの舌は少しほどけてくるのだった。

オリヴィエはピアノについた。アントアネットはいつも自分でひかないで、かれにばかりひかしておいた。なぜなら、ピアノをひくのがかれの唯一の慰みだった。そしてかれは全力を尽くしてひいた。かれは音楽に対してりっぱな天分をそなえていた。活動するよりも愛するのに適したかれの女性的な天性は、自分が演奏する音楽家らの思想にやさしく結びつき、それといっしょにとけあい、その最も微細な色合いをも熱心な忠実さで演奏しだした——が、それも、かれの弱い腕と息との許す限りにおいてであつて、トリスタン²やベートーヴェンの後期のソナタなどをひく非常な努力には、腕は折れそうになり、息は絶えなくなるのだった。それでかれは好んで、モーツァルト³やグルック⁴のうちに逃げこんだ。そしてそれらはまた、姉の好きな音楽でもあつた。

時とすると、彼女も歌うことがあつた。しかしそれはごく単純な歌で、古いメロディーのものだった。彼女は重く弱い中音の含み声を持つていた。ごく内気だったので、人の前でも歌えなかった。オリヴィエ

の前でさえ、ようやくのことだった。のどがつまりそうになった。彼女がことに好んでいたものに、スコットランドのことばでベートーヴェンの曲になった、「忠実なジョニー」というのがあった。ごく静かで……底には情愛がこもっていた……。ちょうど彼女の性質に似ていた。オリヴィエは彼女がそれを歌うのを聞くと、いつも目に涙を浮かべた。

しかし彼女は弟の弾奏を聞く方が好きだった。早く食事のあと片づけを終わろうと急いでいた。そしてオリヴィエの弾奏をよく聞くために、台所のとびらをあげ放しておいた。彼女は非常に注意していたけれども、かれはがまんしかねて、さらさら片づける音がすると、不平を言った。すると彼女はとびらをしめた。あと片づけが終ると、やって来て低いすにすわった。それもピアノのそばにはなく——（なぜなら、かれは弾奏中そばにだれかがいることを許しえなかった。——暖炉のそばにであった。そしてそこで、子ねこのようにかきみこみ、背をピアノの方に向け、一かたまりの練炭が音もなく燃え尽きてゆく炉の赤い輝きに目をすえながら、過去のことがらをうっとりと思ひ浮かべていた。九時が打つと、彼女は無理にも、もうす時間だとオリヴィエに知らせなければならなかった。かれにその弾奏をやめさせるのはつらいことだったし、また自分もその夢想からさめるのはつらいことだった。しかしオリヴィエにはまだ晩の勉強が残っていたし、寝るのがあまりおくれでもいけなかった。けれどかれはすぐには言うことをきかなかった。音楽をやめてまじめに仕事にかゝるには、いつもしばらく時がかゝった。かれの考えは他の方面へうつっていた。そのぼんやりした心持から脱しないうちに、三十分もたつことがしばしばあった。アントアネットは机の向こう側で、かきみこんで仕事をしながらも、かれがなんにもしていないことを知っていた。けれど、かれを監視しているようなふうをしながら、かれの気分をいらだたせはしまいかと恐れて、あま

りかれの方をのぞきこむことができなかった。

かれはその日その日をとりとめもなく過ごしてゆく自由気ままな年齢——幸福な年齢——に達していた。つまらぬことをもおもしろがるその目は、アントアネットのへやの中を見まわしていた——（勉強の机は、アントアネットのへやに置いてあるのだった。——）つげの小枝といっしょにぞうげの十字架が上方にかゝっている鉄の小さな寝台——父や母の肖像——塔と鏡のような池とを持ったいなかの町を示している古い写真、などの上にかれの目は落ちた。それから、黙って仕事をしている姉のおおざめた顔を見ると、彼女に対する深い憐憫と自分自身に対する腹立ちとに、かれはとらわれるのだった。そこでかれははっとわれに返り、ぼんやりしていたのがしゃくにさわった。そして元気に勉強を始めて、むだにした時間を取り返そうとした。

休みの日には書物を読んだ。ふたりは別々に読んだ。互に愛情をいदैてはいたけれど、同じ書物を声高くいっしょに読むことはできなかった。慎みが足りないように思われていやだった。りっぱな書物は、心の沈黙のうちにのみさゝやかるべき秘密のようだった。あるページが非常におもしろい時には、かれらはそれを相手に読んで聞かせはしないで、その部分に指をあてて書物を渡しあった。そして言った。

「読んないらんないさ。」

そしてひとりが読んでいる間、それを読んでしまった方は、目を輝かしながら、相手の顔に現われる情緒を見守っていた。そしていっしょにその情緒を楽しんだ。

しかし多くは書物を前にしてひじをつきながら、べつに読もうともしなかった。ふたりは話をした。ことに夜がふけてくるにつれて、ますます心のことを打ち明けたくなり、口がききやすくなっていた。

オリヴィエは悲しい考えをいだいていた。弱い男であるかれは、他人の胸に自分の悩みを注ぎこんで、その悩みからのがれる必要があった。かれは種々の疑惑に苦しめられていた。アントアネットはかれを励ました。その弱点に対してかれを保護してやらねばならなかった。それは毎日くり返される不断のたゞかいだったが、オリヴィエは苦々しい痛ましいことながら口にした。言ってしまうとほっとした。そういうことさしているかは、ずっとあとになって気づいた。かれは姉の力を奪ってしまい、自分の疑惑を姉のうちにしみこませているのだった。が、アントアネットはそういう様子を少しも見せなかった。生まれつき勇敢で快活であったから、もう長い前から快活さを失っているのに、やはり、しいてうわべだけはそれを装っていた。時とすると深い倦怠に襲われ、みずから決心している一生犠牲の生活に反撥心（たげこころ）が起ることもあった。しかし彼女はそのような考えを退け、そういう考えを分析しようとしなかった。心ならずも起ってくる考えであって、それを容認しているのではなかった。そして祈禱（とうがく）の力で助けられた。たゞ、心が祈りえない時——（そういうこともあった。）——心がかわききってしまったような時は、そうはいかなかった。いららして自分を恥しながら、神の恵みが再び来るのを黙って待つよりほかはなかった。オリヴィエはかつてそうした苦悩に気づいたことがなかった。そういう時にアントアネットは、いつも何かの口実を設けて、かれのもとから離れるか自分のへやに閉じこもるかした。そして危機が過ぎ去った時にしか出て来なかった。出て来る時には、苦しんだことを悔んでいるかのように、にこやかに悩ましげで、前よりいっそう優しくなった。

（豊島与志雄訳「ジャン・クリストフ」による）

ORomain Rolland (1866—1944) フランスの小説家、思想家、音楽評論家。一九〇三年から十年間、パリの高等師範学校とソルボンヌ大学とで音楽史を講じた。高い知性、鋭い感受性、豊かな生活力にあふれていたかれは、精神主義・人道主義に立って、多くの著作を残した。戯曲に「獅子座の流星群」、長編小説に「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」、偉人の評伝に「ベートーヴェン伝」「ミケランジェロ伝」「トルストイ伝」、自叙伝に「内面の旅路」などがある。

○Jean Christophe 十巻ある長編小説で、一九〇四年から一二年までかゝって完成し、一六年にノーベル文学賞をさづけられた。仮想のドイツ人作曲家クリストフを主人公とし、その変化に富んだ一生を描いたものである。あらゆる苦悩と戦いながら、虚偽に反抗して、真実と芸術を求めてやまない主人公の激しい気概が、全編を通じて強く流れている。クリストフが創造力と深遠な心情を代表するのに対して、その親友のフランス人オリヴィエは、批判力と明敏な知性を代表する人物である。こゝに引いたオリヴィエの少年時代のことは、第六巻に出ている。

【注】

- (一) Richard Wagner (1813—1883) ドイツの作曲家、楽劇作家。ベートーヴェンの交響曲を研究し、「ローエングリン」「タンホイザー」「名歌手」などをはじめ、多くの楽曲・楽劇がある。
- (二) Tristan and Isolde 「トリスタンとイゾルデ」ワグナー「亡命時代の作で、一八六五年ミュンヘンの王立歌劇場で初演された。
- (三) Wolfgang Amadeus Mozart (1756—1791) オース

トリアの天才音楽家。宮廷音楽師の子。洋琴・提琴を独学で覚え、七才の時欧州を演奏旅行し、十二才で歌劇を作曲した。その作曲中「フイガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」などは最も有名である。

(4) Christoph Willibald Gluck (1714—1787) オーストリアに生まれた。その天分はよく詩と音楽とを調和し、虚飾を去り、劇的效果を重んじ、咏唱・叙唱を改良して歌劇に一新時期を画したといわれる。

【研究】

- 1 アントアネットは、オリヴィエがどんな人間になることを望んでいたか。

II うたう心

- 2 アントアネットは、オリヴィエがどんな行爲をしても、べつに責めなかつたのはなぜだろうか。
- 3 オリヴィエが「彼女（アントアネット）に対する深い憐憫と自分自身に対する腹立ち」を感じたというのは、どういうことか。
- 4 オリヴィエが「他人の胸に自分の悩みを注ぎこんで、その悩みからのがれる必要があつた。」とは、どういうことか。
- 5 このきょうだいは、魂の安らぎを得ただろうか。

II うたう心

四 晋我追悼曲

北寿老仙をいたむ

蕪

村

君あしたに去りぬゆふべのこゝろ千々に
なんぞはるかなる

君をおもうて岡のへに行きつ遊ぶ
岡のへなんぞかく悲しき

たんぼゝの黄になづなの白う咲きたる
見る人ぞなき

四 晋我追悼曲

きゝすのあるがひたなきに鳴くを聞けば
友ありき川をへだてて住みにき

へげのけぶりのほと打ちちれば西吹く風の
はげしくて小竹原ますげはら
のがるべきかたぞなき

友ありき川をへだてて住みにきけふは
ほろゝともなかぬ

君あしたに去りぬゆふべのこゝろ千々に
なんぞはるかなる

わが庵のあみだ仏ともし火もものせず
花もまるらせずすこゝとたゞずめるこよひは
ことにたふとき

(頼原退蔵編「蕪村全集」による)

○蕪

村(1716—1783)

江戸時代の俳人、画人。本姓は谷口氏。名は寅、蕪村はその号。その他別号が多い。撰津の人。中年江戸に遊ぶ。のち丹後の与謝に住み、与謝を氏とした。晩年京都に移り、天明三年六十八で没した。後世、芭蕉とともに俳諧史上の最高峰といわれる。その作品の多くは「蕪村句集」「蕪村翁文集」などに収められている。この「晋我追悼曲」は、早見家の庫中から発見されたのを、晋我五十回忌追善(寛政五年 1793)の際、その追悼句文集に加えられたものという。

○頼原退蔵

(1794—1918)

国文学者。長崎県出身。京大国文学科卒業。文学博士、京都大学教授。江戸文学を専攻し、俳諧文学の造詣が極めて深かった。著書に、「俳諧文学」「江戸文芸論考」「江戸時代語の研究」などがある。

【注】

(一) 早見晋我(1669—1749)の俳号。晋我は下総国結城郡本郷の人で、介我の門人。宝晋齋其角がかつて遊行のおり、その家につえをとどめて風流を語り、晋の一字を

与えたという。延享二年正月廿八日、七十五で没した。その長子は、巴人の門に入って桃彦とよび、二世晋我を継いだ。父子二代ともに蕪村と親交があった。

【研究】

- 1 「なんぞはるかなる」とはどいついふ気持か。
- 2 この韻文の、形式の上での特色はどういう点にあるか。
- 3 この韻文の用語の特色をあげてみよ。
- 4 この詩の構成を考えてみよ。

五 万葉秀歌

斎藤茂吉

石激る垂水の上のさわらびのもえいづる春になりけるかも(巻八・二四一八) 志貴皇子

志貴皇子の喜びの歌である。一首の意は、巖いわの面を音たてて流れおつる、滝のほとりには、もうわらびがもえいずる春になった、喜ばしい、というのである。「石激る」は「垂水」の枕詞として用いているが、意味のわかっているもので、形状言の形式化・様式化・純化せられたものと見なしうる。「垂水」は垂る水で、あまり大きくない滝と解釈してよいようである。「垂水の上」の「上」は、ほとりというぐらゐの意にとつてよいが、滝下より滝上たかみの感じである。この初句は、「石激」で旧訓「いはそゞぐ」であったのを、考くわで「いはばしる」と読んだ。なお、類聚古集るいしゅうに「石灑」とあるから、「いはそゞぐ」の訓を復活せしめ、「垂水」をば、巖の面をば垂れて来る水、たら／＼水の程度のもものと解釈する説もあるが、私は、初句を「いはばしる」と読み、全体の調子から、やはり垂水をば小滝ぐらゐのものとして解釈したく、小さくとも激湍たんとの特色を保存したのである。

この歌は、志貴皇子の他の歌同様、歌調が明朗・直線的であつて、しかも平板におちることなく、細かい顫動せんどうを伴ないつゝ、莊重なる一首となつてゐるのである。喜びの心がすなわち、「さわらびのもえいづる春になりけるかも」という、一気に歌いあげられた句に象徴せられてゐるのであり、小滝のほとりのわらびに主眼をとゞめられたのは、感覚がきわめて新鮮だからである。この「けるかも」と一気に詠みくだされたのも、容易なるがごとくにして決して容易なわざではない。この歌は、皇子の作中でもすぐれており、万葉集中の傑作の一つだと言つていいようである。だいたいの以上のごとくであるが、「垂水」を普通名詞とせず、地名だとする説があり、その地名も撰津豊能郡の垂水、播磨明石郡の垂水の両説がある。もし地名だとすると、垂水すなわち小滝を写象の中に入れてなければ、この歌は価値が下がると思ふのである。次にこの歌に寓意を求める解釈もあるが、やゝ穿鑿せんさくに過ぎた感で、むしろ「水流れ草もえて、万物の時

を得るを喜びたまへる御歌なるべし。」(拾穂抄しゅうすいしょう)の、簡明な解釈の方が当たつてゐると思ふ。

うらうらに照れる春日はるびにひばりあがりこゝろ悲しもひとりしおもへば(卷十九、四二九二)

大伴家持

家持が天平勝宝五年(753)二月二十五日に作つたものである。一首はうら／＼かに照らしておる春の光の中に、ひばりが空高くのぼる、独居して、物思ふとなく物思えば、悲しい心がわくのを禁じ難いというので、万葉集の大部分の歌が対詠的、相対的なうたえの歌であるのに、この歌は、不思議にも独詠的な歌である。歌に、「ひとりしおもへば」というのがそれを証しているが、独居沈思の態度はすでに中国の詩のおもかげでもあり、仏教的静観の趣でもある。これも家持が至り着いた一つの歌境であつた。

天平二年(730)の旅人宅の歌に、山上憶良やまののおくれの、「春さればまづ咲く宿のうめの花ひとり見つゝや春日くらさむ」(卷五、八一八)には、やゝこの歌と類似点があるが、それ以外のもの多くは恋愛情調で、対者(男女)を予想したものが多し。したがって人間的肉体的なものが多い。しかるにこの歌になると、すでにその趣が違つて、自然観入による、その反応としての詠嘆になつてゐる。

卷十九(四一九二)のほとゞぎすならばにふじの花を詠じた長歌に、「夕月夜かそけき野べにはる／＼に鳴くほとゞぎす」とあるのもまた家持の作、「ひばりあがる春べとさやになりぬれば都も見えずかすみたなびく」(卷二十、四四三四)もまた家持の作で、この方は卷十九のよりも製作年代がおそい(天平勝宝七年(755)三月三日)のは注意すべきである。なお、その三月三日には、安倍沙美鷹あべのしめいが、「朝な朝なあがるひばりになりてしか都に行きてはや帰り来む」(卷二十、四四三三)という歌を作つてゐるが、やはり家持の影

響と思われるふしがある。

この歌の左に、「春日遅々として、鶺鴒正に啼く。悽惻の意、歌に非ずは、撥ひ難し。よりにこの歌を作り、もちて締緒を述ぶ云々」という文がついている。鶺鴒はひばりと読ませており、和名抄でもそうだが、実はうぐいすに似た鳥だということである。

み芳野の象山の隙の木末にはこゝだも騒ぐ鳥のこゑかも (巻六、九二四)

山部赤人

聖武天皇神龜二年(725)夏五月、芳野離宮に行幸の時、山部赤人の作ったものである。「象山」は芳野離宮の近くにある山で、「隙」は「間」で、間とか中とかいう意味になる。「奈良の山の、山の際に、い隠るまじ」(巻一、一七)とどう額田王の歌の「山の際」も、奈良山の連なっている間にといい意。こゝでは、象山の中に立ち茂っている樹木というのに落ち着く。

一首の意は、芳野の象山の木立ちの茂みには、実にたくさん鳥が鳴いている、というので、中味は単純であるが、それだけこゝに出ている中味がみがきをかけられて光彩を放つに至っている。この歌は下半に中心が置かれ、「こゝだも騒ぐ鳥の声かも」に作歌衝迫もおのずから集注せられている。この光景に相對したと仮定してみても、「こゝだも騒ぐ鳥の声かも」とだけに言いきれないから、この歌はやはりすぐれた歌で、亡友島木赤彦も力説したごとく、赤人傑作の一つであろう。「こゝだ」という副詞も注意すべきもので、集中、「妹が家に雪かも降ると見るまでにこゝだもまがふうめの花かも」(巻五、八四四)、「たが苑のうめの花かも久方の清き月夜にこゝだ散り来る」(巻十、二二二五)などの例がある。この赤人の「こゝだも騒ぐ」は、おもに群鳥の声であるが、鳥の姿も見えていてかまわぬし、若干の鳥の飛んで見える方がか

えっていいかもしれない。また、結句の「かも」であるが、名詞から続く「かも」をすえるのはむずかしいのだけれども、この歌では、「こゝだも騒ぐ」に続けたから声調が完備した。そういう点でも、赤人の大きい歌人であることがわかる。

石見のや高角山の木の間よりわが振るそでを妹見つらむか (巻二、一三二)

柿本人麻呂

柿本人麻呂が石見の国から妻に別れて上京する時詠んだものである。当時人麻呂は石見の国府(今の那賀郡下府上府)にいたものようである。妻はその近くの角の里(今の都濃津附近)にいた。高角山は角の里で高い山というので、今の島星山であろう。角の里を通り、島星山のふもとを縫うて江川の岸に出たものようである。

大意。石見の高角山の山路を来てその木の間から、妻のいる里に向かって、振った私のそでを妻は見たであろうか。

角の里から山までは距離があるから、実際は妻が見なかったかもしれないが、心の自然的な現われとして歌っている。そして人麻呂一流の波動的声調でそれを統一している。そしてたゞ威勢のよい声調などというのではなく、妻に対する濃厚な愛情の出ているのを注意すべきである。

夏麻引く海上瀾の沖つ渚に船はとゞめむさ夜ふけにけり (巻十四、三三四八)

東歌

この巻十四は、いわゆる「東歌」になるのであるが、東歌は、東国地方に行われた、がいて民謡ふうな短歌を蒐集分類したもので、したがって巻十、十一、十二あたりと同様作者がわからない。しかし、作

者も単一でなく、中には京から来た役人、旅人等の作もあるうし、京に住んだことのある遊行女婦のたぐいも混じっていろいろ、あるいは他から流れこんだものが少しく変形したものもあり、京に伝達せられるまでいくらか手を入れたものもあるだろう。そういうぐあいに単一でないが、だいたいから見ると、東国の人々によっていつのまにか作られ、民謡として行われていたものが大部分を占めるようである。したがって巻十四の東歌だけでも、年代は相当の期間が含まれているものごとく、歌風は、だいたい訛語を交じえた特有の歌調であるが、必ずしも同一歌調で統一せられたものではない。

「夏麻ひく」は夏のあさを引く畑歌の、うねの「う」から、うなかみの「う」に続けて枕詞とした。「海上瀉」は下総に海上郡があり、すなわち利根川の海に注ぐあたりであるが、この東歌で、「右一首、上総国の歌」とあるのは、いにしえ、上総にも海上郡があり、今市原郡に合併せられた、その海上であろう。そうすれば、東京湾に臨んだ姉が崎附近だろうとせられている。一首の意は、海上瀉の沖にある洲のところに、船を泊めよう、今夜はもうふけてしまった、というのである。単純素朴で古風な民謡のにおいのする歌である。「船はとよめむ」はたゞの意向でなく感慨がこもっていて、そこでひとたび休止している。それから結句をふたたび起して詠嘆の助動詞で止めているから、下の句で二度休止がある。この歌は、伸び伸びとした歌詞で特有な東歌ぶりと似ないで、略解などでは、東国にいた京役人の作か、東国から出て京に仕えた人の作でもあろうかと疑っている。また巻七(一一七六)に、「夏麻ひく海上瀉の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず」というのがあって、上の句は全く同一である。この巻七の歌も古い調子のものであるから、どちらかが原歌で、他は少し変化したものであろう。巻七の歌も、「霧旅にて作れる」の中に集められているのだから、東国での作だろうと想像せられるにより、二つとも伝誦せられているうち、一つは東

歌として蒐集せられたものの中にはいったものであろう。二つ比べると巻七の方が原歌のようでもある。

この歌の次に、「葛飾の真間の浦廻をこぐ船の船人さわぐ波立つらしも」(三三四九)という東歌(下総国歌)があるのに、巻七(一一二八)に、「風早の三穂の浦廻をこぐ船の船人さわぐ波立つらしも」という歌があって、下の句は全く同じであり、風早の三穂は、風早を風の強いことに解し、三穂を駿河の三保だとせば、どちらかが原歌で、伝誦せられて行った近国の地名に変形したもので、巻七の歌の方が原歌らしくもある。しかし、これらの東歌というのも、やはり東国で民謡として行われていたことは確かであろう。仙覚抄に「よそへよめる心あるべし」云々とあるのは、民謡的なものに感じての説だと思ふ。

(「万葉秀歌」による)

○斎藤茂吉(1882—) 本名茂吉。歌人、医者。山形県出身。東大医学部卒業。医学博士。長く青山病院院長の職にあった。子規の「竹の里歌」を読んで作歌に志し、明治三十九年左千夫の門にはいった。「アララギ」発刊

とともにその同人となり現在に及んでいる。大正二年「赤光」を出して歌壇に名声を博し、赤彦とともに「アララギ」を代表した。この歌集によって近代的感觉を万葉調に歌いあげ、たくましい生命と精神力を結集した。著書に、歌集「赤光」「あらたま」「遍歴」など、歌論・研究に、「童馬漫語」「童牛漫語」「柿本人麿」「源実朝」などがある。

【注】

- (1) 天智天皇第七皇子。藤原時代の歌人。
- (2) 寛永版本のよみ方。
- (3) 賀茂真淵著「万葉考」六卷。
- (4) 藤原敦隆著、二十卷。
- (5) 北村季吟著「万葉拾穂抄」。

- (6) 奈良朝時代末期の歌人(718—80)。大伴旅人の子。万葉集の編集はかれに負うところが多いといわれている。
- (7) くわしい書名は和名類聚抄と言う。和漢の、主として物の名を集めて意味を説明し、その語の音や和訓をつけた辞書である。梨壺の五人(後撰和歌集を選び、万葉

集にはじめて古点を加えた人々」のひとり、源順(911-983)が、青年のころ著したものである。

(8) 奈良朝前期の歌人。人麿とともに歌仙と称せられる。聖武天皇の朝の人で、しばしく天皇の供をして近畿の名勝を探った。

(9) 近江朝時代の人。鏡王の娘、天武天皇の妃。初期万葉のすぐれた女流歌人。

(10) 歌人。本名久保田俊彦(1676-1720)。長野県出身。伊藤左千夫に師事し、大正三年以来「アララギ」歌風の

【研究】

- 1 それ／＼の歌の特徴、作家の特色を考えてみよ。
- 2 関係事項の略年表を作ってみよ。
- 3 万葉の時代、社会を調べて、歌との関連を考えてみよ。
- 4 近代短歌と万葉集との関係について調べてみよ。

六 ほたる 狩

谷崎潤一郎

この文は、「細雪」上・中・下三巻のうち、下巻からその一部を引いたものである。この長編小説は、一九三〇年代から四〇年代初頭へかけての物語である。だいたい、阪神地方を中心舞台に、旧家の四人の姉妹がもし出す情調の世界が描き出されている。中でも、三番めの娘が三十五歳で結婚するまでの見合い話と、末娘のやゝ無軌道な行動が、物語の中心の筋をなしている。

すなわち、蒔岡家の先代なきあと、長女鶴子の婿(辰雄)が当主となって、今は東京に出ている。次女幸子は嫁して芦屋に住み、夫婦で、三女雪子、末女妙子の世話を、なにくれとしている。

この一節は、雪子の見合い話を中心にしたものである。場所は岐阜県大垣在。鶴子の夫の縁家菅野家で、この采配をふるっているのが未亡人やす(辰雄の姉)、当主はその子耕助、嫁が常子、ふたりの孫があり、兄が惣助、妹が勝子。蒔岡家一行は幸子、雪子、妙子、それに幸子の娘悦子の四人である。

眠れないのは場所が変わったせいでもあるが、それより疲れ過ぎていたのであろう。けさはいつもより早く起きて、暑い中を汽車と自動車に半日ゆられて、夜になってから、またまっ暗なたんぼ道を子供たちといっしょに元気に駆けずりまわったりして、一里以上も歩いたかしらん。……でもほたる狩というものは、あとになってからの思い出の方がなつかしいような。……幸子はほたる狩といえば、文楽座で見た朝顔日記の宇治の場面、——人形の深雪と駒沢とが屋形船の中でさゝやきをかむす情景を知っているだけで、妙子と言ったように友禅の振りそでなどを着て、野面の夕風にすそやたもとをひるがえしながら、うちわであちらこちらとほたるを追うところに風情があるのだと、なんとなく思いこんでいたのであったが、実際はそんなものではなく、暗いあぜ道や草むらの中などを行くのですから、お召物がよくれます、どうかこれにお着替えになってと言ってお出されたのは、今夜のために特に用意したものなのか、それともいつも貸しゆかたがわりに備えてあるのか、幸子、雪子、妙子、悦子にまで、それ／＼ちゃんと柄行きを見立てたモスリンのひとつであった。ほんまのほたる狩は絵のようなわけにはいかんねんなど、妙子は笑ったが、なにしろやみ夜ほどよいのであるから、着る物にみやびを競うおもしろさはなかった。それでも家を出た時分には人顔がぼんやり見分けられる程度であったが、ほたるが出るという川のほとりへ行き着い

たころから、急激に夜が落ちて来て、……小川といつても、畑の中にあるみぞの少し大きいくらいな平凡な川がひとすじ流れ、兩岸には一面にすゞきのような草が長くおい茂っているのが、水が見えないくらい川面におゝいかぶさっている、最初は一丁ほど先に土橋があるのだけがわかつていたが、……ほたるというものは人声や光るものをきらうという事で、遠くから懐中電燈を照らさぬようにし、話し声も立てぬようにして近づいたのであったが、すぐ川のほとりへ来てもそれらしいものが見えないので、きょうは出ないのでしようかとひそく声でさゝやくと、いゝえ、たくさん出ています、こちらへいらっしゃいと言われてずつと川の縁の草むらの中へはいりこんでみると、ちょうどあたりがわずかに残る明かるさから、刻々と墨一色の暗さに移る微妙な時に、兩岸の草むらからほたるがすい〜と、す〜きと同じような低い弧を描きつゝ、まん中の川に向かって飛ぶのが見えた。……見渡すかぎり、ひとすじの川の縁に沿うて、どこまでもどこまでも、果してもなく兩岸から飛び交わすのが見えた。……これが今まで見えなかったのは、草がたけ高く伸びていたのと、その間から飛び立つほたるが、上の方へ舞い上がらずに、水を慕って低く揺曳するせいであった。……が、その、真のやみになる寸刻前、落ちくぼんだ川面から濃い暗黒がはい上がって来つゝありながら、まだまやく〜と近くの草のゆれ動くけはいが視覚に感じられる時に、遠く、遠く、川のつゞく限り、幾筋とない線を引きつゝ、両側から入り乱れつゝ点滅していた。幽鬼めいたほたるの火は、今も夢の中にまで尾を引いているようで、目をつぶってもあり〜と見える。……ほんとうに、今夜じゅうで一番印象の深かったのはあの一刻であった。あれを味わっただけでもほたる狩に来たかいはあった。……なるほどほたる狩というものは、お花見のような絵画的なものではなくて、冥想的な、……どこでも言ったらよいのであろうか。それでいておとぎ話の世界じみた、子供っぽいところもあるが、……あの

世界は絵にするよりは音楽にすべきものかもしれない。お琴かピアノかに、あの感じを作曲したものがあつてもよいが。……

彼女は、自分がこうして寢床の中で目をつぶっているこの真夜中にも、あの小川のほとりでは、あれらのほたるが一晩じゅう音もなく明滅し、数限りもなく飛びこっているのだと思うと、言ひようもない浪漫的なこゝちに誘ひこまれるのであった。なにか、自分の魂があくがれ出して、あのほたるの群れにまじつて水面を高く低く、ゆられて行くような、……そういえばあの小川は、ほたるを追って行くと、ずいぶん長く、一直線に、どこまでもつゞいてる川であった。彼女たちはところどころに架してある土橋をときどきあちらへ渡りこちらへ渡りして、……川へ落ちこまないように警戒しあいながら、……目がほたるのように光るといふを恐れながら行ったが、いっしょについて来た菅野家の男の子、六つになる惣助はこのへんの地理を熟知していて、一寸先も見えない暗中をすばしく走りまわった。惣助惣助と、今夜の案内に立った父親の耕助、——菅野家の当主が、心配しており〜とどなった。その時分になるとほたるがあまりたくさんいるので、だれも遠慮なく声を出したが、お互に、ほたるにつられてつい離れ〜になるので、始終呼びあつていないと、やみに取り残されてしまう心配があった。幸子はいつか雪子とふたりだけになつていたが、向こう岸で、こいちゃん、こいちゃんと言っている悦子の声と、それに答える妙子の声のとぎれとぎれに、……少し風が出て来たので、……聞えたり消えたりした。なんといつても子供っぽい遊びになると、三人のうちでは妙子が一番気も若いし、からだもきくので、こういう時にはいつも彼女が悦子の相手をさせられる。……その、川の向こうから風に伝わって来る声、今も幸子の耳に聞える。……おかあちゃん、おかあちゃんどこ、……こゝやわ、……ねえちゃんは、ねえちゃんもこゝやわ、……悦子

ほたるを二十匹とったよ、……川にはまらんようにしなさいや。……耕助が道ばたの草を引き抜いてほうきのような束を作って持っているのを何にするのかと思つたら、それにほたるをとまらせて捕らえるのであつた。ほたるの名所といへば、江州の守山あたりにも、岐阜市の郊外などにもあるが、たいがいそういう土地では捕獲することを禁じている。こゝは名所ではないかわりに、いくらとつてもやかましいことをいうものはいないと耕助は言つたが、一番たくさんとつたのは耕助で、次は惣助だつたであろう。父子は勇敢に水ぎわへおりて行つたりして捕らえた。耕助の手にある草の束が光の粒で玉帚たまはきのようになった。幸子たちはどこまで行つたら引返すのか、容易に耕助が帰るうと言わないので、風が強くなつて来ましたね、そろく帰りましたよかと言つたら、もう帰り道なんですよ、来た時と別な道を通つて来ましたわれたが、それでもなかなか帰りが着かないので、知らないうちにずいぶん遠くまで来ていることがわかつた。そして、突然、さあこゝですよと言われてみると、いつのまにか菅野の家の裏門の前にもどつていた。……みんなが手に手に幾匹かのほたるをそれくゝの容器に入れて持ち、幸子と雪子とはたもとの先に入れて握りながら、……

よいのそれらのできごとが、あとさきの順序もなく幸子の頭の中ではほたる火のように入り乱れたが、自分分は夢を見ていたのかしらん、そう思つて目を開くと、小さい電燈のともっている頭の上の欄間に、昼間見覚えのある額がかゝつていた。それは「爛柯亭」としてした奎堂伯けいどうの書であつたが、「奎堂」がだれであるかも知らない幸子は、たゞ「爛柯亭」の三字を読んだだけであつた。と、暗い次の間の方で、何か光つたものが横に流れたけはいがしたので、首をもたげて見ると、どこからか迷いこんだほたるが一匹、かとり線香の煙に追われて逃げ場を求めているのであつた。さつき、取つて来たほたるの大部分を前裁せんざいに放し

てやつた時、家の中へもおびたゞしく舞いこんで来たのを、寝る前、雨戸を締める時にすっかり庭へはき出したのであつたが、どこかに残つていたのであるうか。ほたるはふわりと五六尺の高さに舞い上がつたが、もう舞う力がないほど弱つており、へやを斜めに横切つて、片すみの衣桁いげたに、まだあのまゝつるしてあつた彼女の衣裳の上に留まつた。そして友禪の模様の上をはいながらたもとの中に忍びこんだらしく、お納戸おなうのたけしほたけしほの地をすかしてほのかに光つているのが見える。彼女はかやりの煙があまりこもるとのどを痛めそうなので、起きて、素焼きのたぬきの容器にはいつた線香の火を消した。それから、ついでにそのほたるをつかまえて、——手をはわれるときみが悪いので、ちり紙をまるめてそつと包んで、——雨戸の無双窓のすきまから外へ放したが、見ると、さつき植えこみの間だの池のみぎわだのにあんなにたくさんきらめいていたほたるが、おゝかたあの小川のほとりへ逃げ帰つたのもあるうか、ほとんど残らず飛び去つて、庭はうるしのようなやみにかえていた。彼女は再び寢床へはいつたが、やはりぐあいよく寝つかれないので、あちらこちら寝返りを打ちながら、すやくと寝ているらしい三人の寢息に耳を澄ました。八畳の間の、床の間に沿うて幸子、その隣りに妙子、ふたりの向こう側に雪子と悦子、というふう

に、四人が頭を両方から向かいあわせて寝ているのであつたが、ふと幸子は、たれかがかすかないびきをかいてゐるのに気づいて、なおよく耳を澄ますと、それは雪子であるらしかった。彼女は、その、細い、ほのかな音を、こんなにもかわいいびきがあるうかと、感心しながら聞いていたが、その時寝てゐると思つた妙子が、

「中あんちゃん、起きてるのん。……」

と、静かに寝姿をくずさずに言つた。

「ふん、……あたし、ちよつとも寝られへんねんわ。」
「うちかて寝られへんねん。」

「こいさん、さつきから起きてたのん。」

「ふん、……うち、場所が変わると寝られへん。」

「雪子ちゃんはよう寝てるわな。いびきかいてるわ。」

「雪あんちゃんのいびき、ねこのいびきみたいやわ。」

「ほんに、『鈴』があんないびきかくわな。」

「のんきやわ、あす見合いやいうのんに、……」

幸子は、「眠り」にかけては雪子よりも妙子の方が神経質であったことを思い出した。ちよつと考えると反対のようなのであるが、妙子は常からひと倍夜ざとく、些細な故障にもすぐ目をさますたちであるのに、雪子は見かけによらぬのんきなところがあつて、くたびれると汽車の中などでも、いすに掛けたまま、こんこんと眠る、というふうであつた。

「あす、その人がこゝへ来やはるのん。」

「ふん、十一時ごろ来やはつて、いっしょにお昼御飯食べることになつてるねん。」

「うちはどないするのん。」

「こいさんと悦ちゃんとは、耕助さんの案内で関が原を見に行くねん。そして雪子ちゃんと、あたしと、菅野のねえさんと、三人で会うねん。」

「それ、雪あんちゃんに話してあるのん。」

「さつき、ちよつと話しといたけど、……。」

幸子はきょう、悦子がそばを離れないために雪子とあすの打ち合わせをする暇がなかったので、さつき、ほたる狩の道でふたりきりになった機会に、雪子ちゃん、あすはおひるに会うのんやで、……と、耳打ちをしかけたのであつた。が、雪子が、ふん、と言っただけで、あとを聞こうともせず、やみの中を静かに歩いて来るだけなので、幸子もついさつきほがなく、黙ってしまったのであつたが、妙子が言うように、この気楽そうないびきを聞いては、あすの会見をそんなに気にかけているようには思えないのであつた。

「雪あんちゃんみたいになんべんもしたら、見合いも平気になるもんかしらん。」

「そうかもしれないわな。けど、張り合ひのない人やわ。」

と幸子は言った。

(細雪)による

○谷崎潤一郎(1886—) 小説家、戯曲家。東京都出身。東大国文学科中退。小山内薫と第二次「新思潮」(明治四十二年1909)を創刊した。当時自然主義の反動として新ローマン主義が文壇の主流となろうとしていたが、これはその中でも特に享楽耽美の色彩が強く、怪奇な幻想や刺激的な官能のあやしい世界を描いて独自の地位を占めた。大正九年以後二、三年はかれの戯曲時代であつて、新しい感覚を盛った象徴的、夢想的な心理劇の要素を当時の劇壇に吹きこんだ。震災後は関西に移り、昭和期にはいつてからは作風も一転し、現実の世界から物語の世界へ、西洋的な雰囲気から日本的なそれへ移された。

文章は幅と厚みとを有して豊富な語彙と物語的構想とは堂々たる建築を思わせるが、やゝもすると物語的構成のみに墮する点がないでもない。しかし昭和期のものには芸術的現実性が附加され、渾然たる味を示している。源氏物語的な文章を好み、その連綿たる句読の長い文章は、志賀直哉の短切な文章と対比される。日本の古典的世界への追慕は、源氏物語の口語訳で示され、語彙に関する関心も強く、大阪語の陰影を論じており、

関西方言使用の作品が多い。

昭和二十四年(1949)文化勲章を授与された。選集、全集が刊行されている。

【注】

(1) 現存する唯一のあやつり人形座。大阪市四つ橋のほとりにある。寛政年間(1781-1800)、植村文楽軒によって創始され、明治五年、はじめて文楽座と称した。創始以来各所に移ったが、昭和四年、現在の地に移転興業、戦災後も再び同地で開場している。

(2) 浄瑠璃作品。原名は「生写朝顔話」。天保三年(1832)初演。現在もしばく上演される。駒沢次郎左衛門と深雪との恋物語であつて、宇治のほたる狩の場面はふたりがはじめて相会う場面である。

(3) 「いかないのね」の意。

(4) 「小娘さん」の義で、大阪の家庭で末の娘を呼ぶのに用いる普通名詞。

(5) 「かたしほ」ともいう。織物を織る時、横糸に強ねり糸を織りこみ、織り上げた後、仕上げて縦の方向に生じさせる織。

(6) 「寝られやしないんだわ。」の意。

(7) 「來なざる。」の意。

(8) 「どんなにするの。」の意。

【研究】

- 1 幸子が、寢床の中で目をつぶって今夜のほたる狩を思い出し、ローマン的なこゝちに誘ひこまれたとあるが、どいついう気持か。
- 2 ほたる狩をしたことがあるか。あれば、その光景を思い浮かべて、この文章の描写のよしあしの個所を指摘せよ。
- 3 会話は阪神地方のことばであるが、地の文と何か関係があるように思われる。考えてみよ。
- 4 この小説のセンチンスを調べてみよ。
- 5 全体の気分を絵に書いたら、どのような絵になるであろうか。

III 世界

七 ゲーテ的とシェークスピア的

工藤好美

一

こゝに文学の歴史における二つの偉大な名まえを借りて呼ぶものは、人の生活における二つの対照的な生き方である。ゲーテ的^[1]の生き方は人格の完成をめざし、シェークスピア的の生き方は技能の練達をめざす。ゲーテが代表するものは自己教養であり、シェークスピアが代表するものは技術と客観的な文化である。

ゲーテ肖像



七 ゲーテ的とシェークスピア的

ゲーテの人間は求心的にはたらく。かれは必ずしも利己主義者(egoist)ではない。しかしかれは常に自己中心主義(egoist)である。かれは他のものの中に分散的^[2]にはいつてゆくよりは、むしろ反対に他のものを自己に引き寄せ、そのなかみを取って自己の養いにする。ゲーテの名まえが暗示するように、かれは決して技能を無視するものでもなければ、技能の成果である芸術や一般文化を軽蔑するものでもない。しかしかれにとってそれらのものが意味を持つのは、自己と自己が代表する人性のためであ

り、すべては自己から出て、自己にかえる。

シェークスピアの人間は、これに反して、遠心的にはたらく。かれはメタモルフォーゼ⁽²⁾の大家である。かれは喜んで他のものの中にはいりこみ、他のものになる。かれは内にこもるよりはむしろ外に出、自己の外部に形あるものをつくり出すことに熱中する。かれも——ルネッサンス人⁽³⁾であるシェークスピアの名まえが暗示するように——人性を軽蔑するものではない。たゞ、かれにとってたいせつなのは、人性の静的な質ではなく、人性の効果的なはたらきである。

かれが技能を尊重するのも、それが人性を効果あり、はたらきあるものにするからであり、かれはそのような技能によつてつくり出された芸術・文化のうちに自己の人格のすべてを没入せしめて悔いない。

二

ゲーテ的生活者は嫉妬⁽¹⁾ぶかい自己教養者である。かれはかれの自己を他のなもののためにも犠牲にすることを欲せず、逆に他のあらゆるものを手段あるいは媒介として自己の生活を豊富にし、自己の人格を向上させようとする。しかし自己教養もそれ自身の技術を持つ。いわゆる修養や訓練の技術がそれであり、ゲーテ的生活者は何よりもかゝる技術を身につけなければならない。しかし人は直接、反省と反省的技術によつて自己の人格を完成するよりも、むしろかれがかれの外に形成するものによつて、間接に、しかしより効果的に、内なる自己を形成するといわれる。人間は、たとえば、言語をつくった。しかるにその言語がいかに人間を今日見るがごとき文化的生きものに高めることに役立ったことであろう。ゲーテ的生活者は人間の文化がかく人間自身を形づくるものであり、いわゆる技術の本来の意味はかゝる文化を創

造する能力と方法であることを理解し、そのかぎりにおいて文化と文化的技術を、自己教養の技術とならんで、尊重する。たゞ技術は、しばしば、自由なるべき人間の人格を制限し、文化はそれが奉仕すべき人生の桎梏⁽¹⁾になりがちである。ゲーテ的生活者は技術と文化のこのような傾向に対して嚴重に警戒する。かれは文化一般のことさらに興味を持ち、かゝる文化を実現する技術を尊重しながら、そのいずれの部分、いずれの専門にも限定されることをいとい、むしろ常に自由なしろうと、あるいはしろうと好事家にとゞまることに満足する。なぜなら「自己教養の正しい本能」は、この問題について深く考えたウォールター・ペイター⁽⁴⁾に従えば、「天才の雑多な形式が与えることのできるすべてのものをかり集めることよりも、むしろそれらの中にも自分自身の力を見いだすことをこゝろがける。知力の要求は自分自身の生きていることを感ずることにある。それは文化のそれくゝのわかたれた形式の法則、操作、知的報酬を注意して観察しなければならぬ。しかしそれは単にそれが自己とかれらの間の関係をはかるためである。それはそれらの形式のおのくゝの秘密が見いだされるまで、それらの形式を研究する。そしてひとたび秘密がわかると、それらのおのくゝのものを、すぐれた芸術的人生観によつて、それくゝもの場所にあたにかえらせる。このような性質は、一種の情熱を含んだ冷静をもつて、かれらの古い自己から超脱することを喜ぶ。なによりもかれらはかれらの能力を制限するような、一つの特異な能力に自己をゆだねないよう気をつける。」

三

シェークスピア的技術家は、これに反して、くろうとであり、専門家である。かれは全力を尽くして一

芸一能にひいであることをこゝろがけ、おのれをむなしうして文化の創造に専念する。もちろんかれは技術が目的でなく手段であり、技術と技術的文化の目的が人性の実現にあることを知っている。しかし人性は人性それ自身にとまわって向上することができない。人性は絶えず他の形のあるものに媒介され、あるいは自ら形のあるもの——人格というがごときのも一つのイデーであり形式である——に整えられることよつてのみ向上することができる。そして技術が人性に役立つのは、それが人性にこのような形式と媒介物とを具体的な文化として供給することよつてである。シェークスピア的技术家は技術のかゝる人性的役割を理解し、自己の実現を客観の主観化というよりも、むしろ主観の客観化という形式で成就しようとする。かれは人性の控えめな職人である。かれはいかなる場合にも自己を攻勢的に主張することなく、かえつて自己の技術と技術的作品の陰に隠れようとする。もしも人がかれのうちにゲーテ的な統一の原理としての人格を求めて、その欠如のゆえにかれを責めるならば、かれは静かな微笑をもつて答えるであろう——私はむしろそのような人格を抹消することに努めてきました。しかし、もしあなたがどうしてもそれがほしいとおっしゃるなら、私が自分の技術によつてつくりだしたものを見てください、私はその中に私の自己を埋めました、と。

四

ゲーテとシェークスピア、ゲーテが代表する生活の生き方とシェークスピアが代表する生活の生き方——生活態度としての人格的と技術的、人間主義的と芸術至上主義的、求心的と遠心的、内包的と外延的、しろうと的あるいはしろうとと好事家的と、くろうと的あるいは専門家的とはかくも著しい対照を形づくる。

そこで問題は、これら二つのものがそれぐゝ異なつた特徴と傾向とをもつて、ついに最後まで両立することのできない生活の原理として残るかどうか、ということである。ゲーテ的生活態度とシェークスピア的生活態度とは互にあいれない対立物であつて、われぐゝはそれらのもの最も良き見本に対しては限らない尊敬を持ちながら、結局その一つをとるためには他の一つを断念しなければならぬであらうか。それともそれらのものは正反対の方向から出発しながら、それぐゝの傾向を究極にまでおしすすめることにより、かえつてあい交わり、より高い一つの総合のうちに和解するのであらうか。もしそのようなことがあるとすれば、それはいかなる根拠にもとづくのであらうか。

ゲーテ的生活者は自己教養に専念する。かれの関心と努力の中心はかれ自身の人格であり、その人格から切り離された技術はかれによつて存在しない。しかしかれは、それかといつて、すべての技術を軽蔑するのではない。自己教養がそれ自身一つあるいは一連の技術を要することはすでに述べたとおりであり、ゲーテ的生活者はかれの生活の充実と人格の完成のために、できるだけかゝる技術を習得し練磨しなければならぬ。われぐゝはこのような直接人格に關係する技術を——そとにものをつくる外面的技術に対して——内面的技術と呼んでもよいであらう。内面的技術は外面的技術に比べてはるかに微妙であり、その結果も、それが感覚的でないだけに、容易に把握しがたいものである。しかしよき技術がよき素材と結びつき、個性がその可能性の全範囲にわたつて啓発されるときには、それはそのまゝ一つの生ける芸術品となり、その形式の整合と効果の純一は他の感覚的な芸術品——一つの彫刻、ひとふしの音楽、一編の叙情詩のそれに劣らない。ゲーテはこのような人格的芸術の見本を「ヴァイルヘルム・マイスター」——この小説はそれ自身自己教養の書物である——の中に残している。われぐゝはそこに、生まれつき高貴な一つの魂

が、常に慎重に自己と同質な、あるいは自己の完成にとって望ましい対象を選び、それらのものと自己との音楽的な調和の中に生き、生活のわずらわしい細目は払拭ふつしよされて本質的なものだけが残され、注意深く培養されて、ついに勤勉な、しかし優雅な自己教養の結果、意志はよき趣味の中に溶け入り、観念は精妙な感覚と分かちがたく結びつき、感覚は洗練されてそのまゝ一種の宗教的感受性になっているのを見いだす。この「美しき魂」は、しかしながら、その特殊な魅力にもかゝらず、作者自身にとっては——常に美の中に生きるとともに善の中に生き、なによりも全体の中に生きること念願としたゲーテにとっては、なお理想としてふじゅうぶんであった。われ／＼が「たゞひとり」で自分のうちに閉じこもって倫理的な修業にふけるのはよくない。」と同じ小説の中のひとりの人物は言い、さらに他の人物は、われ／＼が感情を「外部の対象から独立させてわれ／＼の心の中で育てあげると、それはわれ／＼をある程度まで空虚にし、われ／＼の存在の根底を掘りくずすおそれがある。」と述べ、そのような危険からのがれるために、外界の事物の明確な認識の獲得と、なによりも積極的な活動を推奨している。ゲーテにおいてはそのような活動は多方面にわたっていたけれども、それらのものうちで最も重要なのは、いうまでもなく、芸術の創造であった。すべての活動は目的と方法とを持ち、したがってまた技術を持つ。芸術の創造は特に専門的な技術が必要とする活動の一つである。そしてゲーテは、われ／＼のすでに見たように、いかなる専門にもとらわれないという意味においてしろうとあるいはしろうと好家であったけれども、すべての行為がそれぞれに特有な技術なしには効果を持つことができない——行為の主体たる人格を解放する力を持つこともできないということを理解し、かゝる技術の有無が眞の芸術家とディレクタント(悪しき意味における)とを区別するものであることを知っていた。ディレクタントイジムは、ゲーテに従えば、結局、技術の回避

と方法の無知から来るものであり、ディレクタントイジムの誤謬ごごうは「空想と技術とをそのまゝ結びつけよう」と望むところにある。たゞ、かくしてもなおゲーテが技術主義者あるいは芸術主義者というよりも、むしろ人間主義者あるいは人格主義者という方が適切なのは、かれがすべての技術をかれ自身の自己完成に奉仕させ、かれの芸術を結局かれの人格の表現にした点にある。

五

ゲーテが自己教養から出発して生活の芸術化——かれの人格の芸術的完成とその人格の芸術的表現——に終わったように、シェークスピアは客観的な芸術の創造から出発して、自己の発見と自己における人間性の完成に進んだ。もちろんシェークスピアは自己の主観や感傷を直接露出せしめるような作家ではなかった。かくのごときことは、劇作家ならびに俳優としての訓練がかれに許さぬところであった。なぜなら、劇——少なくともシェークスピアの理解したとき劇——は、心の詠嘆ではなく生の客観的な表現からなりたち、俳優は自己を主張することによってではなく、他人になりきることによって観客の心を動かすものだからである。しかしシェークスピアがさまざまに異なった人物の生活と運命を描き、かれらの行動をつぎ／＼に舞台の上に再現しているうちに、かれはそれらすべての人間をその長所と欠点、悪徳と美質の全範囲において理解し、これを愛着と憎悪のいずれにもとらわれることなくして受容する寛大な人間性を発達させることができた。この人間性は静かな人なつこい柔和さ——「ラファエルの」な柔和さとなつて現われた。「gentle Shakespeare」。「心やゆしきシェークスピア。」——かく呼んで周囲の人々はかれに親しみ、かれを愛した——そのやさしさの下にひそむ偉大さには、おそらく、われひとともに気づくことな

技術あるいは芸能から人間性へ——これは、しかしながら、シェイクスピアにのみ限られた過程ではない。同じような過程は、多少の程度において、天才あるいは名人と呼ばれる多くの人々に見られるところである。なぜなら名人に特殊な性向、いわゆる「名人かたぎ」なるものは、芸道に対する異常な熱心さは言うまでもないが、常にある偏狭さと、同時に、不思議に練れた、味わい深い人間性の観念を含む。この偏狭さは技術の制限から来るのであるが、名人の人間の興味は、ひとたび技術によって否定された精神が技術によって深化され、技術を越えて自己を再発見するところから来ると考えられる。そして技術そのものは、技術における人間性の復位とともに、その性格を変えて人間的なものであるものになる。技術にはかくして二つの種類がある。一つは、いわば、人間性以前の技術であり、他の一つは人間性以後の技術——精神化され、人格化された技術である。これら二つの技術は、日本においては、それ々「術」および「道」ということばによって言い表わされて来た。「術」はなおいまだ単なる手段であり、方法である。それは人間に引き寄せられてせい々「うで」——うでがある、というでを持つ、というときの「うで」——になりうる。「道」は、これに反して、茶道の名人が示したように、精神的なものを含み、技術の限定を破って解放された人間性によって特徴づけられる。「道」は常に人間修業の階梯であり、「道」のきまるところ、そこに完成された人格がある。

六

ゲーテ的生活者とシェイクスピア的技術家とは、このように生活態度の異なる二面を代表して対立しつつ、それ々の方法を究極にまでおしすゝめることにより、かえって相互に媒介し、接合する傾向を持っている。なぜであるか。われ々はその根拠を技術そのものの性質のうちに見いだすように思う。

技術が必要として呼び出されるのは、人間が環境を持ち、かれの存在が環境的生物として規定されているからである。人間は自然環境とその人間化されたものとしての社会環境の中に住む。社会は人間の直接の環境であり、自然はさらにその社会を外からとりまくものとして、いわば「環境の環境」であると考えられる。しかし自然は人間の内部にも潜む。衝動とか本能とか言われるものがそれである。本能や衝動は一種の内的自然であり、それらのものは精神的あるいは人格的なものに対しては環境的意義を持つ。人はかくして少なくとも三重の環境の中に置かれ、かれの生活はそれらの環境との複雑な関係において営まれる。かれはいやしくも生きてゆくことができるためには、かれをとりまく環境に順応しなければならず、進んで自己の人格を完成し、その自主と独立とを成就し維持してゆくためには、環境に働きかけてこれに自己に同化しなければならぬ。そこに技術が必要になってくる。もちろんこの技術は人の働く環境のいかによってさまざまに異なる。主として自然環境との関係において要求されるものが経済的技術であるとするれば、社会環境との関係において要求されるものは政治的技術であり、内的環境（本能の衝動）との関係において要求されるものは修養あるいは教養の技術である。いずれにしても人が環境を持ち、環境の中に生きるかぎり、かれはホモフアーベル(8)（製作人）たらざるをえず、かれがホモフアーベルであるかぎり——自己の人格を形づくる人もやはり一種のホモフアーベルである——かれは技術なしにはすまずことができないのである。

技術はこのようにして一方に与えられた客観的存在としての環境と、他方に働く人格としての主体的人

間とを予想する。そのいずれがかけても技術は成立しない。技術は主体と客体とが相互に超越し、かく相互に超越する二者の間に主体の自発的な行為によって関係が生ずるところに成立する。あるいは逆に、主体と客体とは、技術を通してのみ相互に媒介され、結びつけられることができ、技術はこの主体と客体との新しい関係を具体的なものであるいは形——蒸気機関、芸術品、芸術的に完成せる人格というがごとき——として実現するものであるということが出来る。単に環境のみが与えられ、人間は存在しても、その人間が環境によって限定されるだけであって、かく自己を限定する環境を逆に限定しかえず自主的な人間でないならば、そこに技術が生まれる機会はない——ちょうど人間が環境から遊離した主観のうちいつまでも耽溺^{かんじく}することが出来るものならば、かれは技術を要せず、したがってそこにもまた技術の生まれる機会がないように。技術は主観的・客観的な人間存在の根本条件から生まれて、それ自身主観的・客観的なものであり、人間はかゝる技術を通して、かれとかれの環境との間に真に生命的な関係を設立することが出来る。かれの行為は常に技術的である。技術のみがかれを効果的にかれの環境に順応せしめるとともに、環境をかれに同化せしめることができる。順応と同化とは、しかしながら、別々にあるのではない。順応も順応者の創意とくふうを要するように、同化も同化されるものの条件を無視しては、行われぬ。同化と順応とはすべての行為において見られる能動と受動とに対応し、実際その一つの現われにすぎない。そして能動と受動とが二にして一なる運動の両面であるように、順応と同化も環境の人間の環境的行為として分離すべからざる関係を持つ。そして能動的な同化が主として行動主体たる人格の働きを示すように、受動的な順応においてあらわになるものは客観的に与えられた環境の必至的条件であるが、これら二つの互に対応するものが一つの具体的な行為として効果を持つことができるのは、それが主観的・客観的な技術を通し、技術的行為として行われるからである。

七

技術はかくして相互に対立し否定しあうものの統一として成立する。それは環境に働きかけてこれを自己の要求に従わせようとする人間の主観的目的に沿って現われながら、その要求が与えられた環境の秩序と法則とに従うのでなければ実現しない。そのかぎりにおいて技術はきびしく客観的なものでありながら——われ／＼がさきに注意した技術の技術人に与える精神的訓練も、技術のかゝる厳格な客観性から来ると考えられる——単に環境の必至によって限定されるのではなく、あくまでも自由な主体の自発的な活動の方式として人間的・人格的なものである。

技術のかゝる弁証法的性格を明らかにするとき、われ／＼はわれ／＼が前から問題にしているゲーテ的生活者とシェイクスピア的技術者との関係をよりよく理解することができる。ゲーテ的生活者は技術における主体的なものを代表し、シェイクスピア的技術者は技術における客観的なものを代表する。ゲーテ的生活者も環境の中に生きるかぎり技術にたよらざるをえず、技術にたよる以上、その技術における客観的なものを尊重せざるをえない。実際ゲーテは人格主義者ではあったが、決して主観主義者ではなかった。「きみにいいことを打ち明けよう。」と、ゲーテはある時エッケルマンに言った。「退歩し衰えてゆく時代はみな主観的だ。それに反して進歩しつゝある時代にはみな客観的な傾向がある。現代はあげて退歩の時代だ。主観的だからだ。この傾向は文学のみならず、絵画やその他多くのものに見られる。これに反して、すべてのすぐれた努力は内から外へとめざしている。真に進歩しつゝあり、客観的傾向をおびたすべての

偉大な時代において見受けるように。」そしてゲーテは、われ／＼がすでに見たごとく、真の芸術家と悪しきディレッタントとの區別を技術の有無に帰するのであるが、その技術をかれがいかにか客観的なものと考えたかは、次の引用文によっても知られる。「主観的なものがたゞそれだけですでに多くを表わしている場合には、ディレッタントは芸術家に近づくに違いない。たとえば舞踊、音楽、美辞、叙情詩におけるごとく。その反対の場合には芸術家とディレッタントとはより嚴格に區別せられる。そしてかゝる場合ディレッタントイヅムは害を及ぼしかねない。たとえば建築、絵画、演劇、叙事詩、戯曲におけるごとく。」

たゞゲーテは技術にさまざまの種類があり、それらの技術のうち一定の階梯があることに注意し、その階梯の頂に修養の技術を置き、人格の完成を終局の目的としてすべての技術を配列した。

これに対してシェークスピア的技術家も、技術が結局行為の主体たる人間の手段あるいは方法にすぎないことを知っている。手段は人間と人間の主観的目的のためである。それはそのかぎりにおいて人間性と主観性とを分け持つ。しかし手段はたゞちに人間でもなければ主観でもない。人が小石を拾って犬をうち払うとき、小石は手段であり、道具である。小石は人間の目的には役立つけれども、明らかに人間ではなく、人間から独立したものである。あるいは人は小石がそばにないときには、かれ自身の手をもって犬をうち払うかもしれない。そのときには手が手段である。手を手段として用いるものは、手を疎外する、より中枢的な身体あるいは「自己」である。手段はこのようにして人間を主体とし、その人間の主観的目的のためでありながら、それ自身独立せるあるものである。そしてさらにそれは手段として効果を持つためには、それが適用される客観の性質を分け持たねばならない。手段は媒介であるが、それが媒介として役立つのは、それが方法の体系として独立しつゝ、主観と客観との性質を同時に分け持つからである。

シェークスピア的技術者は技術を手段とするが、その手段たる技術の独立性と客観性を尊重し、技術の人性化よりもむしろ人性の技術化に向かう。それにもかゝらず、ゲーテ的生活者が教養の技術家であり、その技術によって生活そのものを一種の完成せる芸術品にするように、シェークスピア的技術家は技術を通り、技術によって鍛えられることにより、新しい人間——「職人的」あるいは「名人的」人間として生まれかわる。そしてかくゲーテ的生活者とシェークスピア的技術家とが反対のものから出発しながら、中道にして出あい、手を握ることができるとは、もと／＼人間が環境を持ち、環境の中で生活を営むために技術的に行動することを要求され、その技術が単に主観的でもなければ客観的でもなく、主観的・客観的なものとして人格的なものと環境的なものとを弁証法的に綜合するからである。

八

生活におけるゲーテ的なものとシェークスピア的なものとは、かく相互に対立しつゝ、技術の二重の性格を通して、媒介統一せられる。人格から出発したものは芸術——われ／＼はこのことばをその最も広い意味に解する——におもむき、芸術から発足したものは人格に達する。かくゲーテ的生活者とシェークスピア的技術家とはそれ／＼の道を行きつくすことにより、かえって他のものに合するのであるが、道程が異なる以上、そのいずれを選ぶかは半ば個性の問題であり、半ば時代の問題である。もしも個人の心理にエンク¹⁰の主張したように内向的 (introverted) と外向的 (extroverted) との區別があるとすれば、内向的性格を持った個人は最も自然に自己教養におもむき、反対に外向的性格の人は客観的技術におもむくであろう。

しかしこの選択には個性と並んで時代の質と傾向とが決定的な影響力を持つ。一般に社会が安定し、歴史の発展が主として個性の純化と深化との方向にあるような時代には、人格的技術が選ばれ、歴史が危機に際会し、社会が制度文物のあらゆる面において新たな発足を要求されるような時代には、客観的に創造的な技術が選ばれるであろう。たゞその場合にも、技術の二重性により、ゲーテ的生活者も教養そのものが技術として客観的なものを要求し、生のすべての営みが内なるものを外に、外なるものを内にすること以外にないことを忘れてはならず、シェークスピア的技術家も、技術が客観の主観に対する超越とともに、主観の客観に対する超越も必要とし、人格の確立をまっしてはじめて技術がその全機能を強力に發揮するものであることを忘れてはならない。外なる世界との関係を忘れた自己教養は無効果であつて、自己を完成したと信ずる瞬間に自己を空虚にし、人格の統率を欠いた技術は人性に役立つことができず、かえつて人性を分裂し混乱せしめるにすぎない。自己と社会、人性と世界にも役立つ技術は、かゝる欠陥のいづれにも墮することなく、まさに生活的技術として内なるものと外なるもの、内に向上的なものと外に建設的なものとを綜合するものであり、人はかゝる技術の性質を明確に把握することにより、自己を貧困にすることなくして外にもものをつくり、外にもものをつくることによって内に自己の人格を完成することができるであろう。

○工藤好美(1898—) 英文学者。埼玉県出身。早大英文学科卒業。台北大助教授を経て、現在早大教授。主著に「ウォールター・ペイター」「コールリッチ研究」「カーライル」などがある。

【注】

(一) Johann Wolfgang von Goethe (1749—1832) ヴェイツの詩人。ダンテ・シェークスピアと並んで世界の三

大天才と称せられる。その数多い詩編と劇詩「ファウスト」とは、ダンテの神曲、シェークスピアの戯曲とともに永遠に世界人類の精神的至宝である。作品には、「若きヴェ

ルテルの悲しみ」「タッソー」「植物の変態」「狐ライネケ」「イタリヤ紀行」「ヴェイルヘルム・マイスター」「ヘルマンとドロテア」「西東詩編」「詩と真実」「親和力」などがあり、邦訳も数種出ている。

(二) Metamorphose ドイツ語。「変形」の意。

(三) Renaissance 欧州にて十四世紀から十六世紀にかけて起つた文芸復興のこと。ルネッサンスということばは単に再生とさうことであつて、最初は学問の復興という意味であつたが、やがて芸術の復興の意味に移され、さらに人間生活全般にわたる革新運動の意味に用いられるようになった。

(四) Walter Horatio Pater (1839—1894) 英国の批評家。はじめ英国国教の牧師を志したが、後、転じてユニテリアン教主義から哲学上の折衷説に傾いた。

“Studies in the History of the Renaissance” (1873) の名著がある。

(五) Wilhelm Meister ゲーテの長編小説。「修養時代」と「遍歴時代」との二部より成る。第一部では、自己の使命を、演劇の改良と、それによる人間性の向上に求めた主人公ヴェイルヘルムの修養時代を描き、第二部では、

家庭を持つたかれが理想国家の建設と、その国民たるベキ子弟の教育のため、子孫を連れて全世界を遍歴する。著者の自伝を骨子としたもので、ゲーテの全人間がこの作に反映されているといわれる構想雄大な作品である。

(六) dilettante ものずき、好事家。道楽に美術・文学などをやる人。

(七) Sanzio Raffaello (1483—1520) イタリアの文芸復興期の画家。レオナルドやミケランジェロのごとき独創的な偉大さは持たなかつたかわり、独自の柔軟性と変同性とをもつて、常に外からの影響に身を聞き、これを内に取り入れ、ついに現象の核心を把握する画家にまで発展することができたといわれている。その作に「スタンツァの壁画」「シストのマドンナ」などがある。

(八) homo faber ラテン語。

(九) Johann Peter Eckermann (1792—1854) ドイツの著述家。ゲーテに認められその秘書になつた。「ゲーテとの対話」があり、ゲーテ研究に資するところが多い。

(一〇) Carl Jung (1875—) スイスの精神病学者、心理学者。かれは人間の性格を、内向型と外向型とに分類し、現代の性格学発展に大きな貢献をした。

【研究】

- 1 各節の要旨をまとめて、全体の大意を述べよ。
- 2 この論説に言われている両者の対立的条件を表示してみよ。
- 3 人間生活における技術について話しあつてみよう。
- 4 諸君はいかに生きようとするか。

八 寒山拾得

森 鷗 外

唐の貞観じょうかんのころだというから、西洋は七世紀のはじめ、日本は年号というもののやっとならなかつた時である。閻丘胤りやまきゆういんという官吏がいたそうである。もっともそんな人はいなかったらしいという人もある。なぜかという、閻は台州(1)の主簿になつていたと言ひ伝えられているのに、新旧の唐書(2)に伝が見えない。主簿といへば、刺史とか太守とかいうと同じ官である。中国全国が道に分かれ、道が州または郡に分かれ、それが県に分かれ、県の下に郷ごうがあり、郷の下に里がある。州には刺史といひ、郡には太守という。いつた日本で県より小さいものに郡の名をつけているのは不都合だと、吉田東伍(3)さんなどは不服を唱えている。閻がはたして台州の主簿であつたとすると、日本の府県知事ぐらゐの官吏である。そうしてみると唐書の列伝に出ているはずだといふのである。しかし閻がいなくては話が成り立たぬから、ともかくもいたことにしておくのである。

さて閻が台州に着任してから三日めになつた。長安で、華北の土ぼこりをかぶつて、濁つた水を飲んでゐた男が、台州に来て華中の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになつたので、上ぎげんである。それに、この三日の間に、多人数の下役が来て謁見をする。受持受持の事務を形式的に報告する。そのあわただしい中に、地方長官の威勢の大きいことを味わつて、意気揚々としてゐるのである。

閻は前日に下役のものに言つておいて、けさは早く起きて、天台(4)の国清寺(5)をさして出かけることにした。これは長安にいた時から、台州に着いたらさつそく行こうと決めていたのである。

なんの用事があつて国清寺へ行くかという、それには因縁いんねんがある。閻は長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立とうとした時、あいにくこらえられぬほどの頭痛が起つた。単純なりヨウマチス性(6)の頭痛ではあつたが、閻はへいぜいから少し神経質であつたので、かゝりつけの医者(7)の薬を飲んででもなかなおらない。これでは旅立ちの日を延ばさなくてはなるまいかと言つて、女房と相談してゐると、そこへ小女が来て、「たゞいま御門の前へこじき坊主がまいります、御主人にお目にかゝりたいと申しますが、いかゞいたしましたしょう。」と言つた。

「ふん、坊主か。」と言つて閻はしばらく考えたが、「とにかく会つてみるから、こゝへ通せ。」と言いつけた。そして女房を奥へ引こませた。

元来、閻は科挙(8)に応ずるために、経書(9)を読んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、仏典を読んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし、僧侶や道士というものに対しては、なぜということもなく尊敬の念を持っている。自分の会得せぬものに対する、盲目の尊敬とでも言おうか。そこで坊主と聞いて、会おうと言つたのである。

まもなくはいつて来たのは、ひとりの背の高い僧であつた。垢あかつき破れた法衣(10)を着て、長く伸びた髪を、まゆの上で切つてゐる。目にかぶさつてゐるさくなるまでうちやつておいたものとみえる。手には鉄鉢(11)を持っている。

僧は黙つて立つてゐるので、閻が問うてみた。「わたしに会いたたいと言われたそうだが、なんの御用かな。」

僧は言った。「あなたは台州へおいでなさることにおなりなすったそうでございますね。それに、頭痛に悩んでおいでなさると申すことでございます。私はそれをなおして進ぜようと思つてまいりました。」

「いかにも言われるとおりで、その頭痛のために出立の日を延ばそうかと思つていますが、どうしてなおしてくれられるつもりか。何か薬方でも御存じか。」

「いや。四大の身を悩ます病は幻でございます。たゞ、清浄な水がこの受糧器に一ばいあればよろし。

「はあ、まじないをなさるか。」こういつて少し考えたが、「しさいあるまい、一つまじなつてください。」と言つた。これは医道のことなどは平常深く考えてもおらぬので、どういふ治療ならさせる、どういふ治療ならさせぬという定見がないから、たゞ自分の悟性に依頼して、そのおり／＼に判断するのであった。もちろんそういう人だから、かゝりつけの医者というのも、よく人選をしたわけではなかつた。素問や靈枢でも読むような医者を捜して決めていたのではなく、近所に住んでいて呼ぶのにめんどりのない医者にかゝっていたのだから、ろくな薬は飲ませてもらうことができなかつたのである。今、こじき坊主に頼む気になつたのは、なんとなくえらそうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ばいにするまじないなら、まちがつたところで危険なこともあるまいと思つたのとのためである。

閻は小女を呼んで、くみ立ての水をはちに入れて来いと命じた。水が来た。僧はそれを受け取つて、胸にさゝげて、じつと閻を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもいい、湯でも茶でもいいのである。不潔な水でなかつたのは、閻がためにもつけの幸いであつた。しばらく見つめてゐるうちに、閻は覚えず精神を僧のさゝげている水に集注した。

この時、僧は鉄鉢の水を口にふくんで、突然ふつと閻の頭に吹きかけた。

閻はびっくりして、背中にひや汗が出た。

「お頭痛は。」と僧が問うた。

「あ。なおりました。」実際、閻はこれまで、頭痛がする、頭痛がする、と気にしていて、どうしてもなおせずにいた頭痛を、坊主の水に気を取られて、取り逃がしてしまつたのである。

僧は、静かにはちに残つた水を床に傾けた。そして「そんならこれでおいとまをいただきます。」と言うやいなや、くるりと閻に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、ちよつと。」と閻が呼びとめた。

僧は振り返つた。「何か御用で。」

「寸志のお礼がいたしたいのですが。」

「いや。わたくしは群生を福利し、橋慢を折伏するために、乞食はいただきますが、療治代はいただきますせぬ。」

「なるほど。それではしいては申しますまい。あなたはどちらのおかたか、それを伺つておきたいのですが。」

「これまでおつた所でございますか。それは天台の国清寺で。」

「はあ。天台におられたのですな。お名は。」

「豊干と申します。」

「天台国清寺の豊干とおっしゃる。」閻は、しっかり覚えておこうと努力するように、まゆをひそめた。

「わたしもこれから台州へ行く者であってみれば、ことさらおなつかしい。ついでだから伺いたい。台州には、会いに行つてためになるような、偉い人はおられませんかな。」

「さようでございます。国清寺に拾得と申すものがおります。実は普賢ふげんでございます。それから、寺の西の方に、寒巖かんがんという石窟くつくがあつて、そこに寒山かんざんと申すものがおります。実は文珠もんじゆでございます。さようなら、おいとまをいたします。」こう言つてしまつて、ついで出て行つた。

こういう因縁があるので、閻は天台の国清寺をさして出かけるのである。

ぜんたい世の中の人の、道とか宗教とかいうものに対する態度に三とおりのある。自分の職業に気を取られて、たゞ営々えいぜい役々と年月を送つてゐる人は、道というものを顧みない。これは読書人でも同じことである。もちろん、書を読んで深く考えたら、道に到達せずにはいられない。しかし、そうまで考えないでも、日々の務めだけは弁じていかれよう。これは全く無頓着ぶんとしやくな人である。

次に、着意して道を求める人がある。専念に道を求めて、万事をなげうつこともあれば、日々の務めは怠らずに、絶えず道に志していることもある。儒学にはいつても、道教にはいつても、仏法にはいつてもキリスト教にはいつても同じことである。こういう人が深くは入りこむと、日々の務めがすなわち道そのものになつてしまふ。つゞめて言えば、これはみな道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道というものの存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓着だというわけでもなく、さればといつて自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人とあきらめ、別に道に親密な人がいるように思つて、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して言つてみると、道を求める人なら、遅れているものが進んでいるものを尊敬することになり、こゝにいう中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することのできぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、たまくそれをさし向ける対象が正鶴せいかくを得ていてもなんにもならぬのである。

閻は衣服を改め輿こしに乗つて、台州の官舎を出た。従者が、数十人ある。時は冬のはじめで、霜が少し降つてゐる。椒江しやうかうの支流で、始豊溪しはうほうせきという川の左岸を迂回しつゝ北へ進んで行く。はじめ曇つていた空がようやく晴れて、あお白い日が岸のみみじを照らしている。道で出会う老幼は、みな輿を避けてひざまずく。輿の中では、閻がひどくよい心持になつてゐる。牧民の職について賢者を礼するというのがてがらのように思われて、閻に満足を与えるのである。

台州から天台県までは六十里半ほどである。日本の六里半ほどである。ゆるく輿をかゝせて来たので、県から役人の迎えに出たのに会つた時、もうひるを過ぎていた。知県の官舎で休んで、ちそうになりつゝ聞いてみると、こゝから国清寺までは、つま先上がりの道がまだ六十里ある。行き着くまでには夜に入りそうである。そこで閻は、知県の官舎に泊まることにした。

翌朝、知県に送られて出た。さようもきのうに変わらぬ天気である。いったい、天台一万八千丈とは、いつ、だれが測量したにしても、しょせん高過ぎるようだが、とにかくとらのいる山である。道はなかなかきのうのようにははかどらない。途中で昼飯を食つて、日が西に傾きかゝつたころ、国清寺の三門に着いた。智者大師ちしゃだいしの滅後に、隋ずいの煬帝やうていが立てたという寺である。

寺でも、主簿しゆぼの御参詣ごさんぎだといふのでおろそかにはしない。道翹どうせうという僧が出迎えて、閻を客間に案内し

た。さて茶菓の饗応がすむと、闇が問うた。「当寺に豊干という僧がおられましたか。」

道翹が答えた。「豊干とおっしゃいますか。それは先ごろまで、本堂のうしろの僧院におられましたが、行脚に出られたきり、帰られませぬ。」

「当寺では、どういうことをしておられましたか。」

「さようでございます。僧どもの食べる米をついておられました。」

「はあ。そして何かほかの僧たちと変わったことはなかったのですか。」

「いえ、それがございましたので。はじめ、たゞほね惜しみをしない、親切な同宿だと存じていました豊干さんを、私どもがたいせつにいたすようになりました。するとある日ふいと出て行ってしまわれまして。」

「それは、どういうことがあったのですか。」

「全く不思議なことでございます。ある日、山からとらに乗って帰ってまいられたのでございます。そして、そのまゝ廊下へはいってとらの背で詩を吟じて歩かれました。いったい詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ。生きた阿羅漢ですな。その僧院のあとは、どうなっていますか。」

「たゞいまもあきやになっておりますが、おりく夜になると、とらがまいてほえております。」

「そんなら、御苦労ながら、そこへ御案内を願ひましょう。」こう言つて、闇は座をたつた。

道翹は、くもの網を払いつゝ先に立つて、闇を豊干のいたあきやに連れて行つた。日がもう暮れかゝつたので、薄暗い屋内を見まわすに、がらんとして何一つない。道翹は身をかゞめて、石畳の上のとらの足跡

を指さした。たまく山風が窓の外を吹いて通つて、うずたかい庭の落葉を巻き上げた。その音が寂寥を破つてざわ／＼と鳴ると、闇は、髪の毛の根をしめつけられるように感じて、全身の膚にあわを生じた。

闇はせわしげにあきやを出た。そしてあとからついて来る道翹に言った。「拾得という僧はまだ当寺におられますか。」

道翹は不審らしく闇の顔を見た。「よく御存じでございます。先刻あちらのくりやで、寒山と申すものと火にあたっておりましたから、御用がおありなさるなら、呼び寄せましようか。」

「はゝあ。寒山も来ておられますか。それは願ひてもないことです。どうぞ御苦労ついでに、くりやに御案内を願ひましよう。」

「承知いたしました。」と言つて道翹は本堂について西へ歩いて行く。

闇がうしろから問うた。「拾得さんはいつごろから当寺におられますか。」

「もうよほど久しいことでございます。あれは、豊干さんが松林の中から拾つて帰られた捨て子でございます。」

「はあ。そして当寺では何をしておられますか。」

「拾われてまいってから三年ほどたちました時、食堂で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、そのほか供え物をさせたりいたしましたそうでございます。そのうち、ある日上座の像に食事を供えておいて、自分が向きあつていっしょに食べているのを見つけられましたそうでございます。寶頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか、存ぜずにいたしましたこととみえます。たゞいまでは、くりやで僧どもの食器を洗わせております。」

「はあ。」と言って、闇は二足三足歩いてから問うた。「それからたゞいま寒山とおっしゃったが、それはどういうかたですか。」

「寒山でございますか。これは当寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでおりますものでございます。拾得が食器を洗います時、残っている飯や菜を竹の筒に入れて取っておきますと、寒山はそれをもらいまいるのでございます。」

「なるほど。」と言って、闇はついて行く。心の中では、そんなことをしている寒山・拾得が文珠・普賢なら、とらに乗った豊干はなんだろうなどと、いなか者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひまどう時のような気分になっているのである。

「はなはだむさくるしう所で。」と言いつつ、道翹は闇をくりやのうちに連れこんだ。

こゝは、湯げがいっぱいこもっていて、にわかにはいつてみると、しかと物を見定めることもできぬくらいである。その灰色の中に大きいかまどが三つあって、どれにも残ったまきがまっかに燃えている。しばらく立ち止まって見ているうちに、石の壁に沿うて造りつけてある机の上で、おゝぜいの僧が飯や菜やしるをなべかまから移しているのが見えてきた。

この時道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得。」と呼びかけた。

闇がその視線をたどって、入口からいちはん遠いかまどの前を見ると、そこにふたりの僧がうずくまつて火にあたってゐるのが見えた。

ひとり髪は二、三寸伸びた頭をむき出して、足にはぞうりをはいている。いまひとりは、木の皮で編んだ帽をかぶって、足には木履をはいている。どちらも、やせてみすぼらしい小男で、豊干のような大男ではない。

道翹が呼びかけた時、頭をむき出した方は振り向いてにやりと笑ったが、返事はしなかった。これが拾得だとみえる。帽をかぶった方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。

闇はこう見当をつけて、ふたりのそばへ進みよった。そしてそでをかき合わせてうやくしく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閩丘胤と申す者でございます。」と名乗った。

ふたりは同時に闇を一目見た。それからふたりで顔を見合せて、腹の底からこみ上げて来るような笑い声を出したかと思うと、いっしょに立ち上がって、くりやを駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が、「豊干がしゃべったな。」と言ったのが聞えた。

驚いて跡を見送っている闇が周囲には、飯や菜やしるを盛っていた僧らが、ぞろ／＼と来てたかった。道翹はまっさおな顔をして立ちすくんでいた。

(「鷗外全集」による)

○森 鷗 外(1862—1922) 小説家、戯曲家、評論家、翻訳家。名は林太郎。島根県出身。藩医の家に生まれ、少年時代より、漢学、蘭学を学び、後、東大医学部卒業。明治十七年、ドイツに留学。三十二年、訳詩集「於母影」および雑誌「しがらみ草紙」を出して文学的活躍を始め、以後、「審美綱領」「即興詩人」「ファウスト」「沙羅の木」「雁」など、評論、翻訳、詩歌、小説を数多く発表した。

国文学、中国文学、さらに西洋文学に広く通じたかれは、自然主義的見地にあき足らず、現実主義精神と理想主義精神との調和の上に、理論的な冷静な筆を運び、漱石と並んで、当時全盛の自然主義文学の陣営に對立し、後の耽美派や新ローマン派の文学の勃興をうながした。作品「あそび」は、現実の中に遊ぶかれの態度をめぐりように示したものである。参考書としては、森潤三郎「鷗外森林太郎」、石川淳「森鷗外」などがある。

【注】

- (1) 今の浙江省臨海県の地名、天台山にちなんでその名がある。
- (2) 「旧唐書」は唐一代の歴史で、五代後晋の劉陶等の選。本紀・志・列伝合わせて二百卷あり、中国正史の中に数えられている。「新唐書」は宋の歐陽修、宋祁が「旧唐書」を改修したもので、すべて二百二十卷ある。
- (3) 歴史家、文学博士、新潟県出身。(1846—1918)「大日本地名辞書」の著者。
- (4) 今の浙江省、天台県。
- (5) 天台宗の本山。隋の煬帝(581—618)が智者大師の遺志によって創建したものとされる。
- (6) Rheumatismus 病名。
- (7) 中国の官吏の登用試験。科目によって人材を挙げる意である。周・漢のころから起り、隋のころ制度として定まり、唐のころから詳細な規則ができたが、清末になって廃止された。
- (8) 仏教でいう一切万物の構成要素。すなわち万物は、地・水・火・風の四大要素から成りたつというのである。
- (9) 中国最古の医書の名。「難経」「金匱要略」「甲乙経」の三つと合わせて、「医学五経」といわれる。
- (10) 菩薩の名、文珠とともに釈迦如来の脇侍として、理法をつかさどり、白象に乗り、仏の右方に侍する。
- (11) 菩薩の名。普賢とともに釈迦の脇侍として左側にあって知恵をつかさどる。その像が獅子に駕しているの

上の魚袋は金で飾り、五品以上の魚袋は銀で飾ったという。「賜魚袋」はまた「佩魚袋」とも言い、魚符をたもう

【研究】

- 1 寒山拾得は、なぜ大笑いをして逃げ出したのか。
- 2 閻丘胤の長たらしい肩書きは何を意味するのか。
- 3 道翹は、どうしてまっさおな顔をしたのか。
- 4 閻はどのような人物か。
- 5 この小説は何を言おうとしているか。
- 6 鷗外などを生んだ近代文学は、どのような形をとって現代文学に流れこんでいるか。

は、知恵の威猛を表わしたものである。

- (12) 今の浙江省、臨海県を流れる川。一名靈江・また澄江とも台州河とも言う。
- (13) 字は徳安、俗姓は陳氏(537—597) 中国天台宗の開祖。
- (14) 隋の第二代の皇帝(580—597)。栄花をきわめて、宮殿を築き、大運河を開き、外征をこととし、民を誅求することが甚だしかったので、ついにその臣下に殺された。
- (15) 羅漢ともいう。もと礼拝を受ける人の意。仏教の修業者の悟了到達して、極意に進んだものの称号。
- (16) 十六羅漢中の第一の尊者。長く南天の磨利山に住み、釈迦入滅後の衆生を済度したという。
- (17) 隋の時代に置かれた文武官吏の德行声望あるものに与えられた名誉官で、実際の任務はなかった。
- (18) 諸州の軍事をすべる官で、唐初はおゝむね地方長官が兼ねていた。
- (19) 官名。勲功のあった者に対して授ける官のうち、最高位。唐制では正二品で、三十項の永業田を給せられた。
- (20) 緋は服色。官の服制では、三品以上は紫、五品以上は緋色の正服を着けた。「賜緋」は、五品以上の緋の服色を賜わること。魚袋は、魚符を入れる袋のこと。魚符は、魚形をして左右に分かれる札に官姓名をきざんでおき、一片は宮中に、一片は身にたずさえ、宮中に出入するとき、これを合わせてみて、その人を検したるもの。三品以

て魚袋を佩用する身分のことをいう。

編修委員長 土井忠生
 編修委員 藤原与一 田中浩造
 森田武末 田賢賢
 尾上充次 木原茂

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION DATE Dec. 16, 1949		新 国 語 われらの読書 三	
発行所	印刷者	発行者	著作者
東京都千代田区神田神保町一丁目一番地 三省堂出版株式会社	東京都千代田区神田三崎町二丁目四番地 株式会社三省堂神田工場 代表者 今井直一	東京都千代田区神田神保町一丁目一番地 三省堂出版株式会社 代表者 亀井寅雄	三省堂編修所 代表者 亀井寅雄
		昭和二十五年三月十五日 印刷	昭和二十五年三月二十日 発行
		定価 十八円二十銭	

(15 三省 高国 1204)

一 一 覧 表 一

1 この教科書の、各課の学習要点を次に掲げる。 2 読書を充実させるために、この表を大いに活用するがよい。 3 さらに研究を深めて、自由に問題を見つけることに努め、各自の読書を推し進めるようにしてもらいたい。							
論説	評論	戯曲	小説		短歌	詩	分類
世界への道	シゲエークスピア的的	ハムレット	寒山拾得	ほたる狩	生きるはらから	万葉秀歌	高翔
編者	工藤好美	本多顯彰	森鷗外	「谷崎潤一郎雪」	「ロマンチック」 「ジャンクリストフ」 豊島与志雄	斎藤茂吉鑑賞	原作者 訳者 村上菊一郎
広い世界へ・言語文化の意義	人間の型・世界的人間像	苦悶する魂・性格と心情	悟達の世界・人としての生き方	ローマン的情調・描写と叙情	魂を育てるもの・愛情と反撥	和歌の叙情・歌ごころ	学習のねらいと課題 情熱・近代的な魂 俳句的叙情・古典的詩情 俳句的叙情・古典的詩情

一 覧 表
 「われらの読書 三」学習のために

広島大学図書

01 0130449683

